

田井中遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告100

I 田井中遺跡 (第14次調査)

II 田井中遺跡 (第17次調査)

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

田 井 中 遺 跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告100

- I 田井中遺跡 (第14次調査)
- II 田井中遺跡 (第17次調査)

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

大阪府の東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあります。この河内平野は旧大和川により形成された肥沃な土壌を有する土地で、古くから人々の生活の場として適した地域でした。現在でも先人が残した貴重な文化遺産が数多く残されております。

今日の八尾市の礎を築いた先人たちが、自然を巧みに利用し、土地を開発し、懸命に生きてきた痕跡が、文化遺産の一つである埋蔵文化財であります。温故知新という言葉がありますが、私たちは埋蔵文化財から、地域に対する愛着を育むとともに現在に「生きる知恵と哲学」を学ぶことができるものと考えております。

しかし、このかけがえのない埋蔵文化財が、近年の開発工事の増加により破壊され消滅してゆく運命にあることも事実です。そこで私共は、破壊され消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を、後世に永く伝えるため事業者の御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に務めている次第であります。

今回、八尾市立志紀小学校講堂兼屋内運動場建設および校舎増改築工事に伴い、平成8年度に実施しました田井中遺跡第14次調査と平成10年に実施しました田井中遺跡第17次調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行することになりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様へ深く感謝申し上げますと共に、発掘調査や整理作業に従事された多くの方々に御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成8・10年度に田井中遺跡内で実施した発掘調査の報告書を取録したものである。
1. 内業整理および本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成19年3月を以って終了した。
1. 本書に収録した各調査報告書の文責は以下の通りである。
 - I：成海佳子・古川晴久・荒川和哉
 - II：成海・荒川
1. 全体の編集は荒川が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1：5000の地形図(昭和61年測量、平成6年修正、平成8年7月編纂)、および八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版、平成18年一部改正)を使用した。
1. 本書で使用している標高は、すべて東京湾平均海面(T.P.)である。挿図中ではT.P.は省略し、数値のみを表示した。
1. 本書に掲載した地区割図・遺構平面図の北は、すべて国土座標第Ⅵ座標系(日本測地系)の座標北を示す。図面に表示の座標値はkm・mを省略した。
1. Iにおいて、遺構は下記の略号で表記した。IIにおいては、略号は用いていない。
井戸－SE、土坑－SK、溝－SD、土器集積－SW、落ち込み－SO、自然河川－NR
1. 本書では本文・挿図・図版の遺構・遺物番号はすべて一致している。
1. 本書に掲載した図面の縮尺は、平面図・壁断面図・遺構平面図・遺構断面図については、各図に示した。遺物実測図は1：4を原則としているが、必要に応じて縮尺を変えている。遺物写真の縮尺は任意である。
1. 遺物実測図の断面は、須恵器が黒塗り、瓦・木製品・金属製品・石は斜線、その他は白抜きで表した。
1. 調査および整理過程で作成した写真・図面等の調査成果に関連する資料は、財団法人八尾市文化財調査研究会で保管している。広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

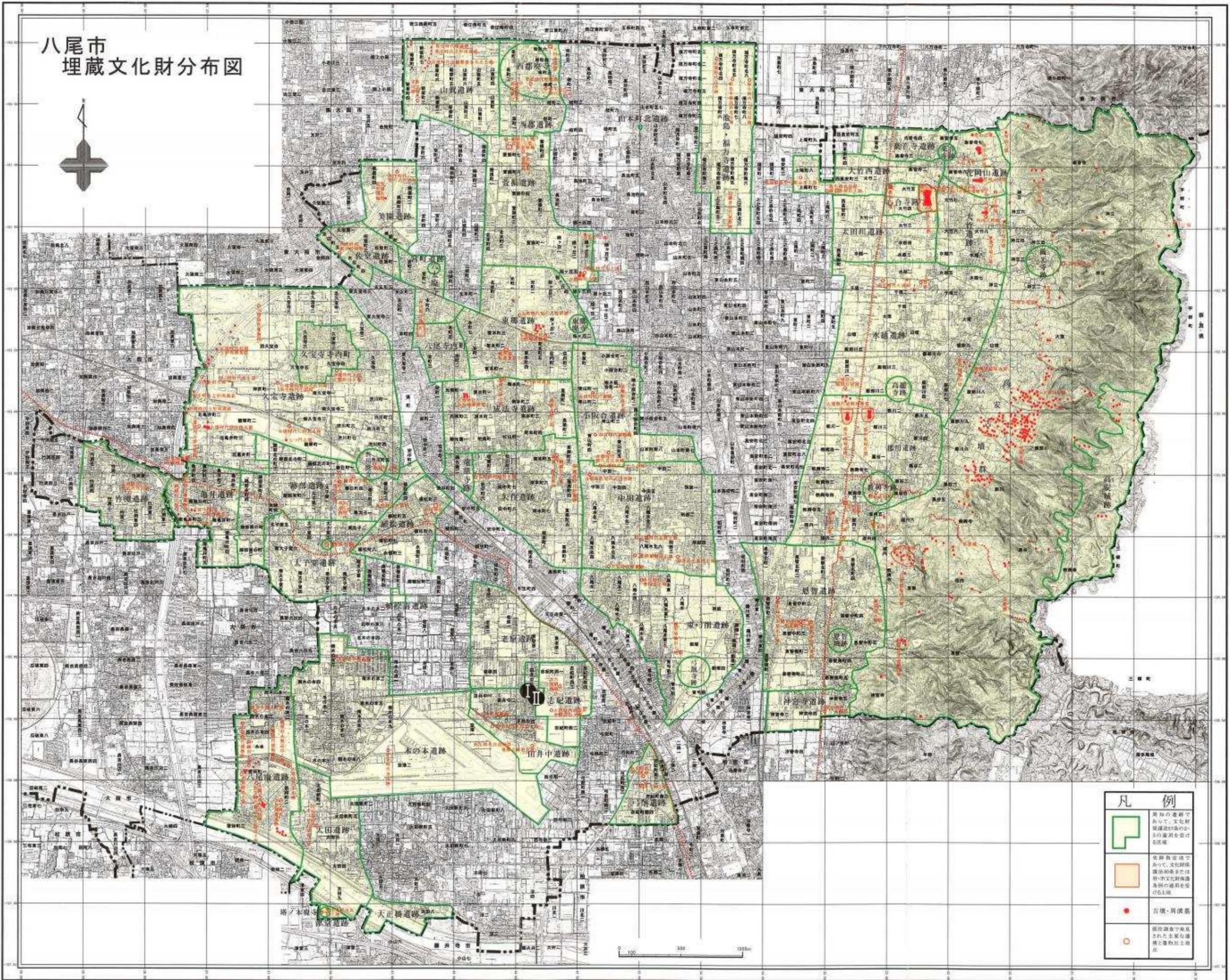
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 田井中遺跡第14次調査(TN96-14).....	1
II 田井中遺跡第17次調査(TN98-17).....	29

報告書抄録

八尾市埋蔵文化財分布図



凡例	
	埋蔵文化財の分布を 示す境界線
	史跡・名勝地で 文化財保護法第16条の 規定に基づき埋蔵文化財 の調査を受ける土地
	古墳・遺跡
	埋蔵文化財調査で 発見された主要な遺物 の出土地点

0 100 500 1000m

I 田井中遺跡第14次調査 (T N96-14)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市田井中3丁目地内で実施した八尾市立志紀小学校講堂兼屋内運動場建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第14次調査(TN96-14)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成8年10月22日～12月27日(実働51日間)に、成海佳子・古川晴久を調査担当者として実施した。
1. 調査面積は、約600㎡である。
1. 現地調査においては、磯上サカエ・中前和代・村井俊子・宮崎寛子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後随時行い、平成19年2月28日に終了した。
1. 本書の執筆は、主に成海・古川が行い、編集は荒川が行った。編集に際し、本文の加除修正および図面・写真レイアウトの一部変更を行った。文責・加除修正した部分は目次に示した。
1. 本書作成に関わる業務の担当は、次の通りである。
図面整理－川村一吉・後藤 喬・佐藤光子・中前・村井・村田知子、遺物実測－沢村妙子・田島和恵・徳谷尚子、遺構図面トレース－荒川、遺物図面トレース－山内千恵子、図面・写真レイアウト－古川、遺物観察表作成－古川、遺物写真撮影－徳谷・古川
1. 基準点測量は、株式会社かんこうに委託した。
1. 現地調査・整理にあたっては、次の方々から御教示を賜った。記して謝意を表する。(五十音順、敬称略)
市村慎太郎((財)大阪府文化財センター)・亀島重則(大阪府教育委員会)

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境(荒川).....	1
第2章 調査に至る経緯(古川・荒川).....	5
第3章 調査の概要.....	6
第1節 調査の方法と経過(古川).....	6
第2節 層序(古川).....	7
第3節 検出遺構と出土遺物.....	8
1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物(成海・古川・荒川).....	8
2) 遺構に伴わない出土遺物(成海・古川).....	21
第4章 まとめ(古川).....	26
第1節 今回の調査成果について.....	26
第2節 八尾市内出土銅鐵について.....	26

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	3
第2図	調査区設定および地区割図	6
第3図	壁地層断面図	9・10
第4図	第1面検出遺構平面・断面図	11
第5図	S E 101出土遺物実測図	12
第6図	畦畔101・畦畔102・畦畔106・畦畔109断面図	13
第7図	畦畔101内出土遺物実測図	14
第8図	第2面検出遺構平面図	15
第9図	畦畔201・畦畔203・畦畔205断面図	15
第10図	畦畔203・畦畔205内出土遺物実測図	16
第11図	第3面検出遺構平面図	17
第12図	第3面検出土坑断面図	17
第13図	S D 303・S D 304出土遺物実測図	18
第14図	S W 301出土遺物実測図	19
第15図	第4面検出遺構平面図	21
第16図	第5面検出遺構平面図	21
第17図	第1層～第11層・第12層出土遺物実測図	21
第18図	第15層出土遺物実測図	22
第19図	第19層出土銅鐵実測図	23
第20図	第19層出土遺物実測図①	24
第21図	第19層出土遺物実測図②	25
第22図	八尾市内出土銅鐵分布図	27
第23図	八尾市内出土銅鐵実測図	27

写 真 目 次

写真1	調査実施前状況	7
写真2	機械掘削状況	7
写真3	S E 101断割り・遺物出土状況	12
写真4	水田106検出足跡群	13
写真5	S W 301遺物出土状況	18
写真6	第19層内銅鐵出土状況	23
写真7	第19層内甕出土状況	24
写真8	第19層内手焙り形土器出土状況	24

表 目 次

第1表	田井中遺跡・志紀遺跡発掘調査一覧表	2
第2表	S E 101出土遺物観察表	12
第3表	第1面検出水田一覧表	13
第4表	第1面検出畦畔一覧表	13
第5表	第2面検出水田一覧表	15
第6表	第2面検出畦畔一覧表	15
第7表	畦畔203・畦畔205内出土遺物観察表	16
第8表	第3面検出土坑一覧表	17
第9表	第3面検出溝一覧表	17
第10表	S D 303・S D 304出土遺物観察表	18
第11表	S W 301出土遺物観察表	18
第12表	第1層～第11層・第12層出土遺物観察表	21
第13表	第15層出土遺物観察表	23
第14表	第19層出土遺物観察表	25
第15表	八尾市内出土銅鏝一覧表	27

図 版 目 次

図版1	第1面全景 第1面全景	図版8	S E 101出土遺物
図版2	水田107 畦畔101・畦畔102	図版9	畦畔101・畦畔203・畦畔205出土遺物
図版3	第2面全景 第2面全景	図版10	S D 303・S D 304・S W 301出土遺物
図版4	畦畔203内遺物出土状況 畦畔205内遺物出土状況	図版11	S W 301出土遺物
図版5	第3面全景 S K 301・S K 302・S D 302検出状況	図版12	S W 301・第1層～第11層・第12層出土遺物
図版6	第4面全景 S D 401検出状況	図版13	第15層出土遺物
図版7	第5面全景 S O 501検出状況	図版14	第15層・第19層出土遺物
		図版15	第19層出土遺物
		図版16	第19層出土遺物
		図版17	第19層出土遺物

第1章 遺跡の位置と環境

位置と地理的環境

本書で報告する田井中遺跡は、大阪府八尾市の南部に位置している。現在の行政区画では田井中1～4丁目・志紀町西2丁目・空港1丁目の東西約0.9km・南北約0.9kmがその範囲である。縄文時代晩期以降の複合遺跡で、弥生時代・古墳時代の集落遺構を主とする。

当遺跡は、河内平野の南部に位置する。河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に囲まれた低地で、旧大和川水系の河川(恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川)や生駒山地に源を持つ小河川による沖積作用により形成されたものである。当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸、平野川の右岸に当たり、南から伸びる羽曳野丘陵先端の谷状の低地に位置していることから古くから洪水の影響を受けやすく、周辺の発掘調査においても洪水に起因する堆積が確認されている。

当遺跡の周辺には、北に老原遺跡、北東に志紀遺跡が接し、長瀬川を挟み、その北東側には矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡が位置する。さらに東に玉串川を挟み恩智遺跡が位置する。また、南東には弓削遺跡・船橋遺跡(藤井寺市)、西には木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡(大阪市)などが位置する。

歴史的環境

当遺跡でヒトの活動の痕跡が確認されるのは、縄文時代晩期以降であるが、縄文時代の遺構・遺物の検出は僅かであり、その実体はわからない。弥生時代前期になり、当遺跡南部には本格的な集落が出現し、その中心を移動しながらも、継続して集落が営まれ、北東側の志紀遺跡で生産活動が行われていたことが既往の調査により確認されている。

弥生時代以降古墳時代までは、概ね、当遺跡南部・志紀遺跡南端部が居住域、その北側の志紀遺跡を中心とする一帯が生産域であった。奈良時代後半には条里地割による水田の開発が行われ、水田を主体とする生産域となった。

南北朝時代に至り、北方の老原にあった村が現在の地に移動し、田井中村と村外に広がる生産域からなる景観が形成された。この景観は近代に至るまで続いた。田井中村とその周辺の条里地割の残る水田地帯からなる景観は、現代、市街化の進行が及び大きく変わりつつある。

ちなみに、本書で報告する田井中遺跡第14次調査・第17次調査が実施された八尾市立志紀小学校は田井中村の北東端に当たり、村の鎮守である神剣神社(牛頭天王社)があった(昭和47 [1972]年、志紀小学校南側の現在地に移転)。

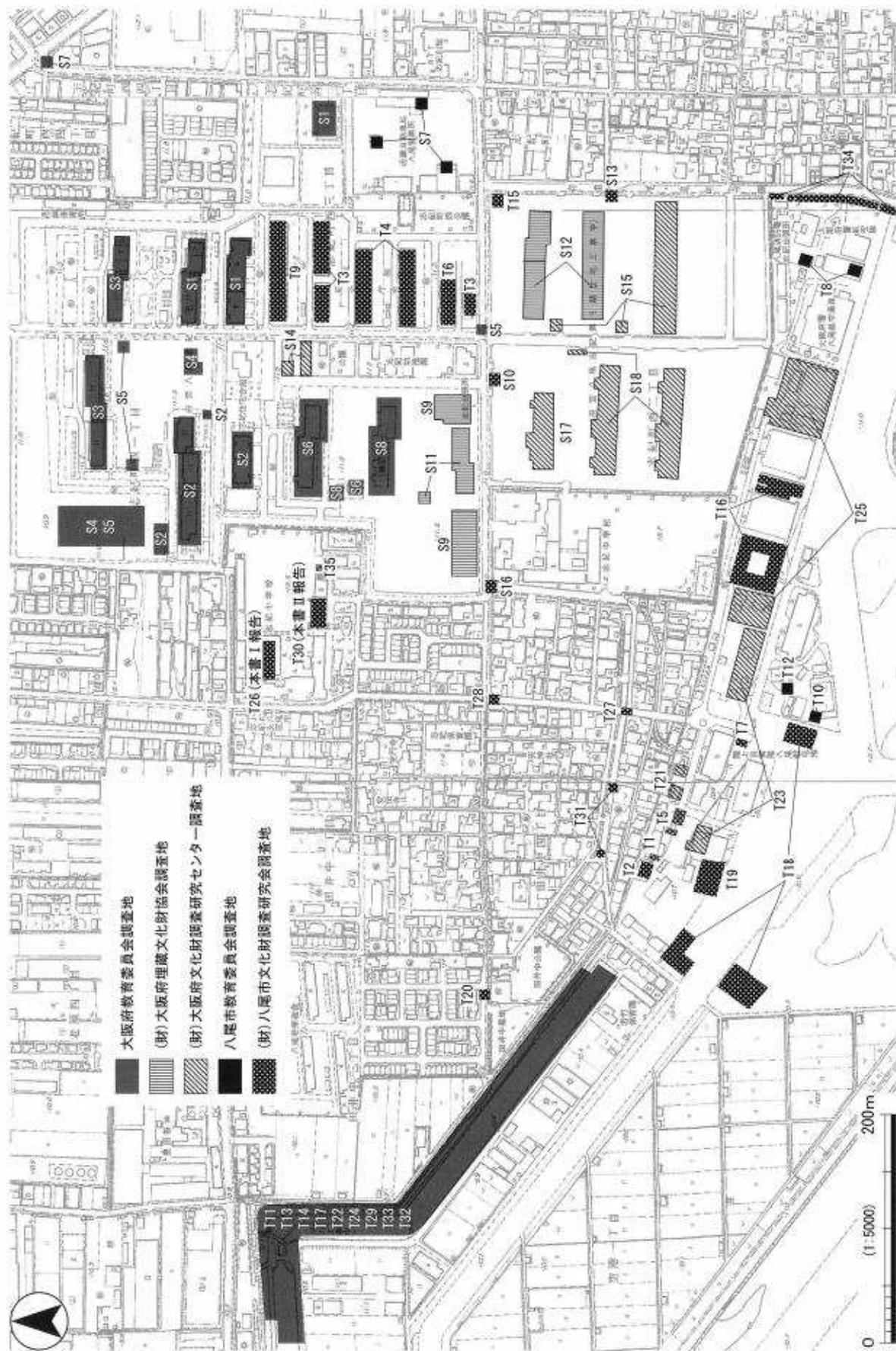
参考文献

- 林日佐子・駒井正明・本間元樹・田坂佳子 1997『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 本間元樹・鹿野 豊編 2002『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集 志紀遺跡(その2・3・5・6) 大阪府営 八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 成海佳子 1994「I 田井中遺跡(志紀遺跡)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告40 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会

第1表 田井中遺跡・志紀遺跡発掘調査一覧表

番号	調査主体(調査名)	調査年度	調査地	面積 (㎡)	調査結果(時期-主な遺構)	文献
T 1	八文研(TN82-1)	1982	空港1	44	時期不明-小穴	1
T 2	八文研(TN84-2)	1984	空港1	155	弥生中期-土坑、古墳-土坑	1
T 3	八文研(TN85-3)	1985	志紀町西3	920	古墳-鎌倉-水田	2
T 4	八文研(TN86-4)	1986~87	志紀町西3	1283	古墳中期-鎌倉-水田	2
T 5	八文研(TN86-5)	1987	空港1	216	弥生前期-後期-土坑	3
T 6	八文研(TN87-6)	1987	志紀町西3	348	弥生中期-古墳前期-遺構面、古墳中期-鎌倉-水田	2
T 7	八文研(TN87-7)	1988	空港1	99	弥生前期-古墳前期(布留)-土坑	4
T 8	市教委(63-279)	1988	空港1	18	古墳-包含層	5
T 9	八文研(TN88-8)	1988~89	志紀町西3	996	弥生後期-鎌倉-水田	2
T 10	市教委(90-29-1)	1990	空港1	9	弥生-平安-包含層	6
T 11	府教委(1次)	1990	空港1	453	弥生中期-竪穴住居?・木棺墓・大溝	7
T 12	市教委(90-29-2)	1990	空港1	14	古墳-包含層	8
T 13	府教委(2次)	1991	空港1	1000	弥生前期-溝、中期-木棺墓、古墳前期-土坑	9
T 14	府教委(3次)	1992	空港1	1215	弥生前期-掘立柱建物・大溝、古墳前期-土坑	10
T 15	八文研(TN88-9)	1992	志紀町西2・4	100	弥生中期-平安-水田耕土	11
T 16	八文研(TN92-10)	1992	空港1	1003	弥生前期-土坑・溝、古墳後期-水田	12
T 17	府教委(4次)	1993	空港1	2910	縄文晩期-竪穴住居?・弥生前期-掘立柱建物	13
T 18	八文研(TN93-11)	1993	空港1	1863	縄文晩期以前-河川、弥生前期-後期-竪穴住居	14
T 19	八文研(TN93-12)	1993	空港1	600	弥生前期-後期-竪穴住居・井戸、古墳後期-溝	15
T 20	八文研(TN93-13)	1993	田井中4	28	縄文晩期-弥生前期-自然河川、近世-井戸	16
T 21	府文協(その1)	1994	空港1	141	弥生前期-溝、中期-溝、古墳初頭-溝	17
T 22	府教委(5次)	1994	空港1	2470	弥生前期-竪穴住居・掘立柱建物・大溝	18
T 23	府文研(その2)	1995	空港1	1600	弥生前期-後期-大溝・竪穴住居・土坑	17
T 24	府教委(6次)	1995~96	空港1 田井中1	1900	弥生前期-竪穴住居・大溝、古墳前期-後期-溝・土坑、飛鳥-近世-水田遺構、古墳-大溝・畦畔、飛鳥-平安後期-水田遺構	19
T 25	府文研(その3)	1996	空港1	4243	弥生-方形周溝墓・溝、古墳-環?	17
T 26	八文研(TN96-14)	1996	田井中3	600	弥生後期-溝・落ち込み、古墳中期-後期-水田	本書Ⅰ
T 27	八文研(TN96-15)	1996	田井中4	23	弥生前期-河川、平安-鎌倉-水田	20
T 28	八文研(TN97-16)	1996	田井中3	7	検出遺構なし	21
T 29	府教委(7次)	1997	空港1	1160	縄文晩期後半-竪穴住居?・土坑・溝、弥生前期-竪穴住居・大溝・溝・土坑・畦畔	22
T 30	八文研(TN97-17)	1997	田井中3	286	弥生中期-河川、古墳中期-水田	本書Ⅱ
T 31	八文研(TN98-18)	1998	田井中4	42	弥生中期-小穴・落ち込み状遺構	23
T 32	府教委(8次)	1998	空港1	290	縄文晩期後半-土坑・小穴・溝、古墳-溝・土坑・小穴、飛鳥-近世-水田遺構・溝・土坑・柱穴	24
T 33	府教委(9次)	1999	空港1 田井中4	315	弥生前期-溝・土坑、弥生中期-溝・落ち込み-木棺墓	25
T 34	八文研(TN2004-19 その1~3)	2004~06	空港1	8426	弥生前期-柱穴・水田、弥生中期-土器棺墓・土坑・溝・水田、古墳前期-周溝墓・土坑、古墳中期-土坑・溝、古墳後期以降-水田	26
T 35	八文研(TN2004-20)	2006	田井中3	16	古墳中期-水田耕土層	27
S 1	府教委(1次)	1983	志紀町西3	1500	古墳-水田	未刊
S 2	府教委(2次)	1985~86	志紀町西1		古墳後期-奈良-水田	28
S 3	府教委(3次)	1988~89	志紀町西1・3	2357	古墳-水田	29
S 4	府教委(4次)	1989	志紀町西1	2856	弥生-古墳-水田	未刊
S 5	府教委(5次)	1990	志紀町西1	2800	弥生前期-江戸-遺構面(水田遺構中心)	30
S 6	府教委(6次)	1991~92	志紀町西1	2454	弥生前期-平安-水田	31
S 7	市教委(91-319)	1991	志紀町西1	75	古墳-中世-水田	32
S 8	府教委(7次)	1992~93	志紀町西1	2261	弥生中期-平安-水田	33
S 9	府文協(その1)	1993~94	志紀町西1	2000	弥生中期-大溝群、弥生中期-鎌倉-水田	34
S 10	八文研(SIK93-1)	1993	志紀町西2	52	縄文後期以前-埋没河川、弥生中期以降-水田耕土層	35
S 11	府文協(その2)	1994	志紀町西1		弥生-鎌倉-水田遺構	36
S 12	府文協(その3)	1994	志紀町西2		弥生-鎌倉-水田遺構	36
S 13	八文研(SIK95-2)	1995	志紀町西2	22	弥生後期-中世の堆積層	37
S 14	八文研(防1次)	1995	志紀町西	455	古墳後期-水田、平安末-鎌倉-水田	17
S 15	府文研(その4)	1996	志紀町西2	1882	縄文晩期-自然河川、弥生中期-平安-水田	38
S 16	八文研(SIK97-4)	1997	志紀町西2	32	縄文土器(晩期)出土	39
S 17	府文研(その5)	1999	志紀町西2		弥生-鎌倉-水田遺構	36
S 18	府文研(その6)	2000	志紀町西2		弥生-鎌倉-水田遺構	36

※記載順序は調査開始日の古い順。



第1図 調査地位置図

第1表文献

・(財)八尾市文化財調査研究会発行

- 1 西村公助 1989「Ⅱ 田井中遺跡発掘調査報告(第1次・第2次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告17 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度]
- 2 成海佳子 1994「Ⅰ 田井中遺跡(志紀遺跡)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告40 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告]
- 3 西村公助 1995「Ⅰ 田井中遺跡(第5次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告46 田井中遺跡]
- 4 西村公助 1995「Ⅱ 田井中遺跡(第7次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告46 田井中遺跡]
- 11 成海佳子 1993「XⅨ 田井中遺跡(第9次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告39 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告]
- 12 西村公助 1995「Ⅲ 田井中遺跡(第10次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告46 田井中遺跡]
- 14 原田昌則・西村公助 1994「22. 田井中遺跡第11次調査(TN93-11)」[平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]
- 15 西村公助 1994「23. 田井中遺跡第12次調査(TN93-12)」[平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]
- 16 岡田清一 1994「Ⅴ 田井中遺跡(第13次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告42]
- 20 古川晴久 1998「Ⅶ 田井中遺跡(第15次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告60]
- 21 古川晴久 1999「Ⅷ 田井中遺跡(第16次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告62]
- 23 高萩千秋 2000「Ⅹ 田井中遺跡第18次調査(TN98-18)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告65]
- 26 樋口 薫 2007「26. 田井中遺跡第19次調査(TN2004-19)」[平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]
2007「27. 田井中遺跡第19次調査(TN2004-19-2)」[平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]
- 27 岡田清一 2007「Ⅰ 田井中遺跡第20次調査(TN-20)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告93]
- 35 成海佳子 1994「Ⅵ 志紀遺跡(第1次調査)」[平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]
- 37 中野篤史 1996「Ⅳ 志紀遺跡(第2次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告50]
- 39 坪田真一 1999「Ⅵ 志紀遺跡(第4次調査)」[(財)八尾市文化財調査研究会報告62]

・八尾市教育委員会発行

- 5 米田敏幸 1989「5. 田井中遺跡(63-297)の調査」[八尾市文化財調査報告20 八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ]
- 6 吉田野乃 1991「Ⅰ. 田井中遺跡(90-29)の調査」[八尾市文化財調査報告23 八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅱ]
- 8 吉田野乃 1992「Ⅰ. 田井中遺跡(90-29)の調査」[八尾市文化財調査報告26 八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ]
- 32 吉田野乃 1992「志紀遺跡(91-319)の調査」[八尾市文化財調査報告25 八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ]

・大阪府教育委員会発行

- 7 亀島重則 1991「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅰ」
- 9 小林義孝 1992「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅱ」
- 10 亀島重則 1993「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ」
- 13 亀島重則 1994「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ」
- 18 岩瀬 透 1996「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ-八尾空港北濠改修工事に伴う事前発掘調査-」
- 19 亀島重則 1997「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅵ」
- 22 亀島重則 1998「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅶ」
- 24 亀島重則他 1999「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ」
- 25 藤田道子 2000「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅸ」
- 28 福田英人 1986「志紀遺跡発掘調査概要-府営志紀住宅建替に伴う調査-」
- 30 山田隆一 1995「志紀遺跡発掘調査概要・Ⅳ」
- 31 西川寿勝編 1992「志紀遺跡発掘調査概要・Ⅱ」
- 33 中村清美編 1993「志紀遺跡発掘調査概要・Ⅲ」

・(財)大阪府文化財調査研究センター発行

- 17 林日佐子・胸井正明・本間元樹・田坂佳子 1997「(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集 田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次) 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書」
- 36 本間元樹・鹿野 豊編 2002「(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集 志紀遺跡(その2・3・5・6) 大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書」
- 38 岩崎二郎・市村慎太郎 1998「(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集 志紀遺跡(その4) 大阪府営志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書」

・(財)大阪文化財センター発行

- 29 福田英人 1990「八尾市志紀遺跡の水田遺構」[大阪府埋蔵文化財研究会(第21回)資料]

・(財)大阪府埋蔵文化財協会発行

- 34 西川寿勝編 1995「志紀遺跡 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第91報」

第2章 調査に至る経緯

既往の調査(第1図・第1表)

田井中遺跡は、昭和50(1975)年に陸上自衛隊八尾駐屯地(八尾飛行場内)での公共下水道工事に際して弥生時代前期に比定される土器片が出土したことによりその存在が確認された。その後、昭和57(1982)年に当調査研究会により陸上自衛隊八尾駐屯地内での発掘調査(第1図-T1)が実施され、時期不明の小穴が検出されている。これが田井中遺跡における発掘調査の嚆矢となる。その後、昭和58(1983)年以降から、平野川改修工事・陸上自衛隊敷地内建物築造工事・公共下水道工事に伴い大阪府教育委員会(以下、府教委とする)・(財)大阪府埋蔵文化財協会(以下、府文協とする)・(財)大阪府文化財調査研究センター(以下、府文研とする)・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、八文研とする)により多次にわたる発掘調査が実施されている。それらの調査成果から縄文時代晩期以降から近世にわたる複合遺跡として認識されている。特に田井中遺跡指定範囲の南西から南端部にかけては、弥生時代前期～中期に比定される集落域の中心とみられ、それを示す大溝・竪穴住居・方形周溝墓などの遺構と多量の遺物が検出されている。田井中遺跡の東端と境界を接する志紀遺跡は田井中遺跡に中心を置く集落の生産域とみられ、各時代の水田遺構が多数検出されている。両遺跡は広義に居住域の田井中遺跡、生産域の志紀遺跡として捉えられている。

今回の調査地周辺の調査成果を概観すると、本調査地の東～南100～400m帯には府営住宅・国家公務員宿舎・自衛隊官舎等があり、老朽化のための建て替えに伴う発掘調査が府教委・府文協・府文研・八文研により実施されている(第1図-T3・T4・T6・T9、S1～S6・S8・S9・S11・S12・S14・S15・S17・S18)。これらの調査では、主に東西方向に大きいトレンチを設定した結果となり弥生時代前期～中期、古墳時代中期～後期、平安・鎌倉時代～近世の水田遺構が検出されている。各時代の水田遺構が検出されたことで、自然地形を巧みに利用した弥生時代前期～古墳時代後期の水田と条里地割によって整然と区画された平安時代以降の水田の移行と土地利用の変遷が確認されている。このうち、本調査地から東に250mで府文協により実施された発掘調査(第1図-S9)では、南北方向に伸びる弥生時代中期に比定される大溝群が一部検出されており、これらは集落を区画する溝の可能性があり注目される。また、本調査地から南東50mの地点で実施した八文研第17次調査(第1図-T30)では、弥生時代中期・古墳時代前期の流路、古墳時代中期～後期にかけての水田遺構が検出されている。

調査の契機

このような情勢の下、八尾市より八尾市田井中3丁目地内において市立志紀小学校講堂兼屋内運動場建設を行う旨の届出が、市教委文化財課に提出された。申請地は田井中遺跡の周知の範囲内であり、埋蔵文化財の存在が予測され、工事に伴いそれが破壊されることは明らかであることから、市教委は記録保存を目的とする発掘調査が必要であると判断した。こうして、市教委・八尾市・八文研との3者で協定書が締結され、八文研が主体となり発掘調査が実施されることとなった。

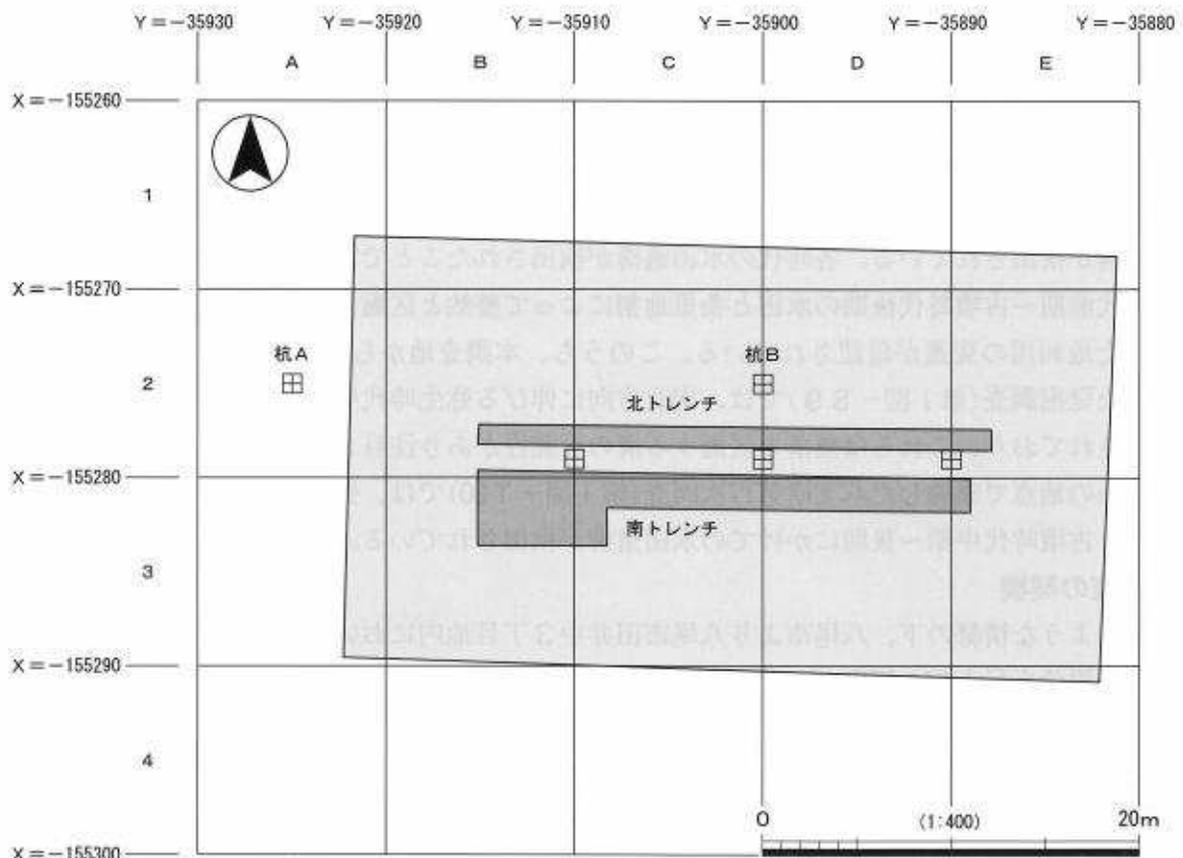
第3章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市立志紀小学校講堂兼屋内運動場建設に伴うもので、八文研が田井中遺跡内で実施した第14次調査にあたる。調査地は1箇所、東西幅約40m・南北幅約20mの長方形である。調査開始前の面積は800㎡を測る。

調査は市教委の埋蔵文化財調査指示書に基づいて、現地表(T.P.+11.3m)から2.4m前後までを機械掘削とし、それ以下約2.0mを人力掘削により実施した。掘削はオープンカット工法で鋼矢板打設などの土留めは行っておらず、安全面を考慮して機械掘削時に壁面に45度の角度で法をつけた。このため、機械掘削終了段階の面積は東西幅35m・南北幅17mの約600㎡を測る。調査深度が下がるにつれて、壁面崩壊が憂慮されたので第1面調査終了後、側溝から約1mの畦を残し、その内側に幅約1mの側溝を新たに設けて調査を進めた。

なお、現地表下約3.5m以下は、掘削深度などの問題から、調査区の中央付近に東西方向に伸びる長さ27.5m・幅1.0m・深さ0.7mのトレンチ(北トレンチ)を設定し、掘削を実施した。その結果、土層断面の状況から第3面下0.4m前後の第26層、第27層の各層上面で遺構を確認したので、北トレンチから南へ1.5m平行した位置に、東西方向に伸びる長さ25.0m・幅2mのトレンチ(南トレンチ)を設定し、平面的な調査を実施した。南トレンチは遺構の広がり追求するため



第2図 調査区設定および地区割図



写真1 調査実施前状況 (南東から)



写真2 機械掘削状況 (西から)

に、西端の一部を南側に拡張している。

調査区の地区割については、調査区のほぼ中央北寄りに国土座標第VI座標系が通る基準点(杭B: $X = -155.275$ ・ $Y = -35.900$)を打設した。そして、杭Bから南に4m地点、さらにこれを基点に東西各10m地点に杭を打設し、調査区全体を10m方眼に設定した。地区名は、東西方向はアルファベット(西からA~E)、南北方向は算用数字(北から1~4)で示し、1A地区から4E地区とした(第2図)。本文中の遺構・遺物の検出地区名はすべてこれに準じている。

第2節 層序(第3図)

今回の調査地では、既存建物(体育館)の基礎部分の杭に伴う攪乱が、深い所では2.5m近くまで及んでいたが、旧耕作土以下の地層が確認できた。調査地で確認できた地層のうち、局地的に見られるものや遺構埋土を除く27層を選んで層序とした。当調査地は、弥生時代後期以降は主に水田耕作地として利用されており、水田耕土の間には微砂ないし粘土質シルトの互層・砂礫からなる洪水堆積層が見られる。ちなみに、第1層から第12層までが機械掘削の対象である。

第1層：バラス・コンクリート塊を多く含む砂質シルト。昭和30~40年代の体育館建設および撤去に伴う盛土・攪乱埋土である。上面(現地表面)の標高はT.P.+11.3mである。

第2層：灰色・灰白色を呈する砂質シルト~粘土質シルト。既存建物建設前の耕土層。酸化鉄の沈着が見られる。

第3層：黄橙色砂質シルト。よく締まる。酸化鉄の沈着が著しく見られる。

第4層：灰オリーブ色砂質シルト。粗粒砂が混じる。ややグライ化。

第5層：灰オリーブ色粘土質シルト。酸化鉄の沈着が著しく見られる。

第6層：灰色細礫混じりシルト。ややしまり弱い。

第7層：灰色シルト~シルト質粘土。しまり弱い。平安時代~室町時代の遺物を少量含む。

第8層：青灰色シルト質粘土。

第9層：灰色シルト~青灰色シルト質粘土。粗粒砂が多く混じる。しまり弱い。

第10層：暗青灰色シルト質粘土。炭酸鉄を多く含む。粘性強い。上面は土壌化している。中世後半の水田面の可能性がある。

第11層：暗灰色シルト質粘土。粗粒砂を少量含む。

第12層：灰色シルトと黄褐色シルトの互層。しまり弱い。湧水が多い。古墳時代後期の洪水層。
畦畔102の東側に見られる。

第13層：褐灰色シルト質粘土。植物遺体を多く含む。主に、畦畔102の西側に見られる。

第14層：青灰色粘土。粘性強い。下部に酸化鉄が著しく見られる。水田耕土。上面は第1面。

第15層：灰色シルト質粘土。粘性強い。

第16層：褐灰色シルト質粘土。植物遺体を多く含む。

第17層：灰色シルト質粘土。酸化鉄が斑点状に付着。やや締まり弱い。水田耕土。

第18層：青灰色シルト質粘土。粘性強い。炭酸鉄を少量含む。上面は第2面。

第19層：灰黒色砂礫混じりシルト質粘土。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層。

第20層：青灰色砂礫混じりシルト質粘土。やや締まり弱い。上面は第3面。

第21層：黄灰色細礫～粗粒砂。暗灰色粘土のブロックが混じる。調査地東部では、砂礫層の下位に灰色粘土質シルトと白灰色微砂の互層が見られる。

第22層：灰色微砂混じり粘土質シルト。砂礫が少量混じる。上面は土壌化している。調査地東部に見られる。

第23層：灰白色微砂と灰色粘土質シルトの互層。第21層との間に植物遺体の葉層を挟む。S O 401埋土。

第24層：灰白色微砂と暗灰色粗粒砂混じり粘土質シルトの互層。S O 401埋土。

第25層：青灰色粘土質シルト。炭酸鉄を少量含む。上面はS D 401構築面。

第26層：灰色微砂。ややしまり弱い。上面は第4面。S O 501埋土。

第27層：青灰色シルト～粘土質シルト。上面は第5面。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物

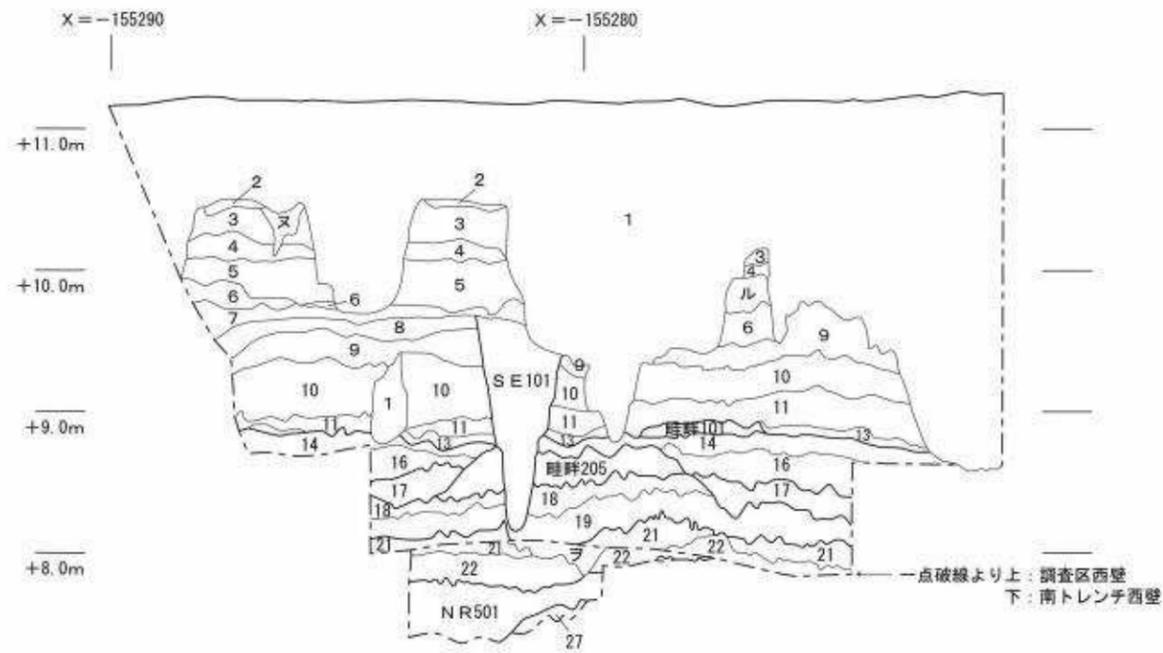
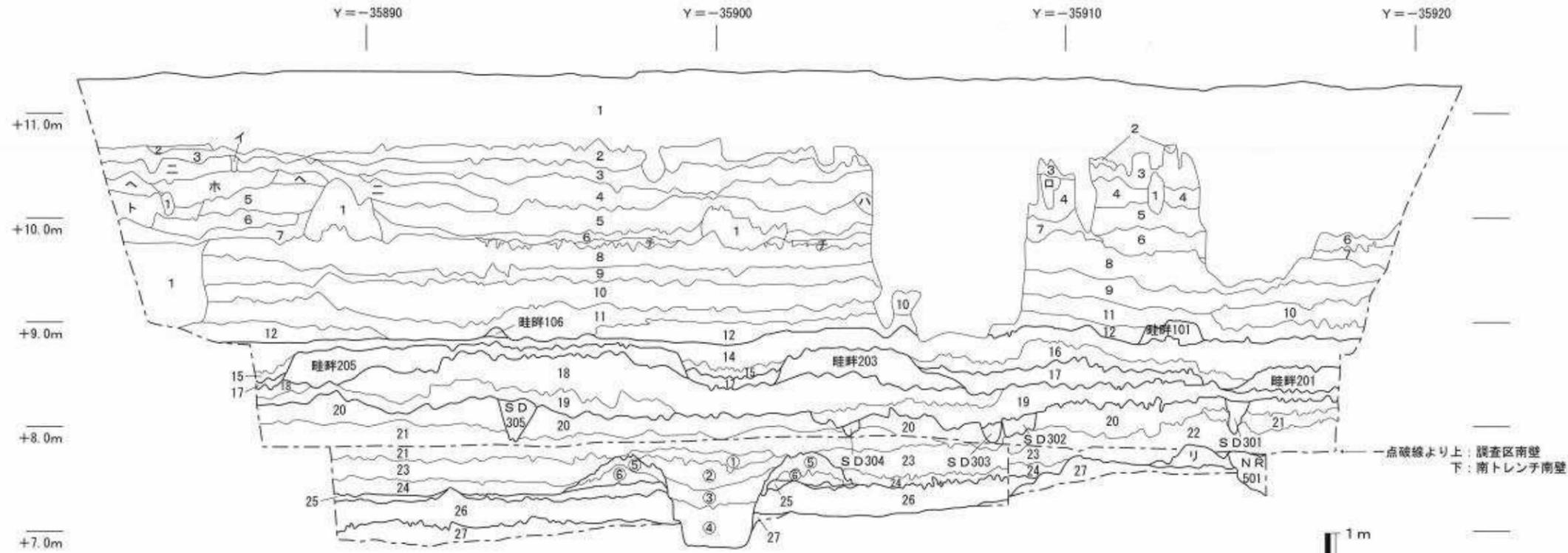
・第1面(第4図、図版1)

現地地表下2.4m前後の第14層上面(T.P.+8.9m前後)において、古墳時代後期後半(6世紀後半)の水田遺構である大畦畔2条(畦畔101・畦畔102)・小畦畔8条(畦畔103～畦畔110)・水田10筆(水田101～水田110)、室町時代中期前半(15世紀前半)に比定される井戸1基(S E 101)を検出した。

井戸(S E 101)

S E 101(第5図、写真3、第2表、図版8)

調査地西部の3B地区で検出した。第1面検出時に掘形を確認したが、本来の切り込み面は第8層上面とみられ、西壁断面から見た本来の深さは1.5m前後である。検出面での掘形の平面形状は隅丸方形、断面の形状は逆台形を呈し、規模は一辺0.95～1.0m・深さ0.80mを測る。掘形のはほぼ中央に桶状の井戸側を埋置している。井戸側は、粗く調整された板材(長さ0.7m、幅9cm前後、厚さ3cm前後)を円形に19枚組み合わせ、外側を2段の籬(タガ)で縛りつけたものである。最下の1段分が遺存していたものと考えられる。掘形内埋土は3層のシルト層を主体にしており、底は第22層粗砂にまで達している。出土遺物は井戸側内底部から出土した室町時代中期前半(15世紀前半)に比定される土師器小皿7点(1～7)、平瓦1点(9)、横櫛1点(10)、石1点のほか、掘形内出土の瓦器椀1点(8)がある。1～7はいわゆる「へそ皿」と呼ばれるもので、口径8.5～9.0



【基本層序の地層】

- 第1層 現代盛土・攪乱埋土
- 第2層 灰色砂質シルト～粘土質シルト
- 第3層 黄褐色砂質シルト
- 第4層 灰オリーブ色砂質シルト
- 第5層 灰オリーブ色粘土質シルト
- 第6層 灰色細礫混じりシルト
- 第7層 灰色シルト～シルト質粘土
- 第8層 青灰色シルト質粘土
- 第9層 灰色シルト～青灰色シルト質粘土
- 第10層 暗青灰色シルト質粘土
- 第11層 暗灰色シルト質粘土
- 第12層 灰色シルトと黄褐色シルトの互層
- 第13層 褐色シルト質粘土
- 第14層 青灰色粘土
- 第15層 灰色シルト質粘土
- 第16層 褐色シルト質粘土
- 第17層 灰色シルト質粘土
- 第18層 青灰色シルト質粘土
- 第19層 灰黒色砂礫混じりシルト質粘土
- 第20層 青灰色砂礫混じりシルト質粘土
- 第21層 黄灰色細礫～粗粒砂
- 第22層 灰色微砂混じり粘土質シルト
- 第23層 灰白色微砂と灰色粘土質シルトの互層(上面に植物遺体) [S O 401埋土]
- 第24層 灰白色微砂と暗灰色粗粒砂混じり粘土質シルトの互層 [S O 401埋土]
- 第25層 青灰色粘土質シルト
- 第26層 灰色微砂 [S O 501埋土]
- 第27層 青灰色シルト～粘土質シルト

【局地的に見られる地層・平面未検出の遺構埋土】

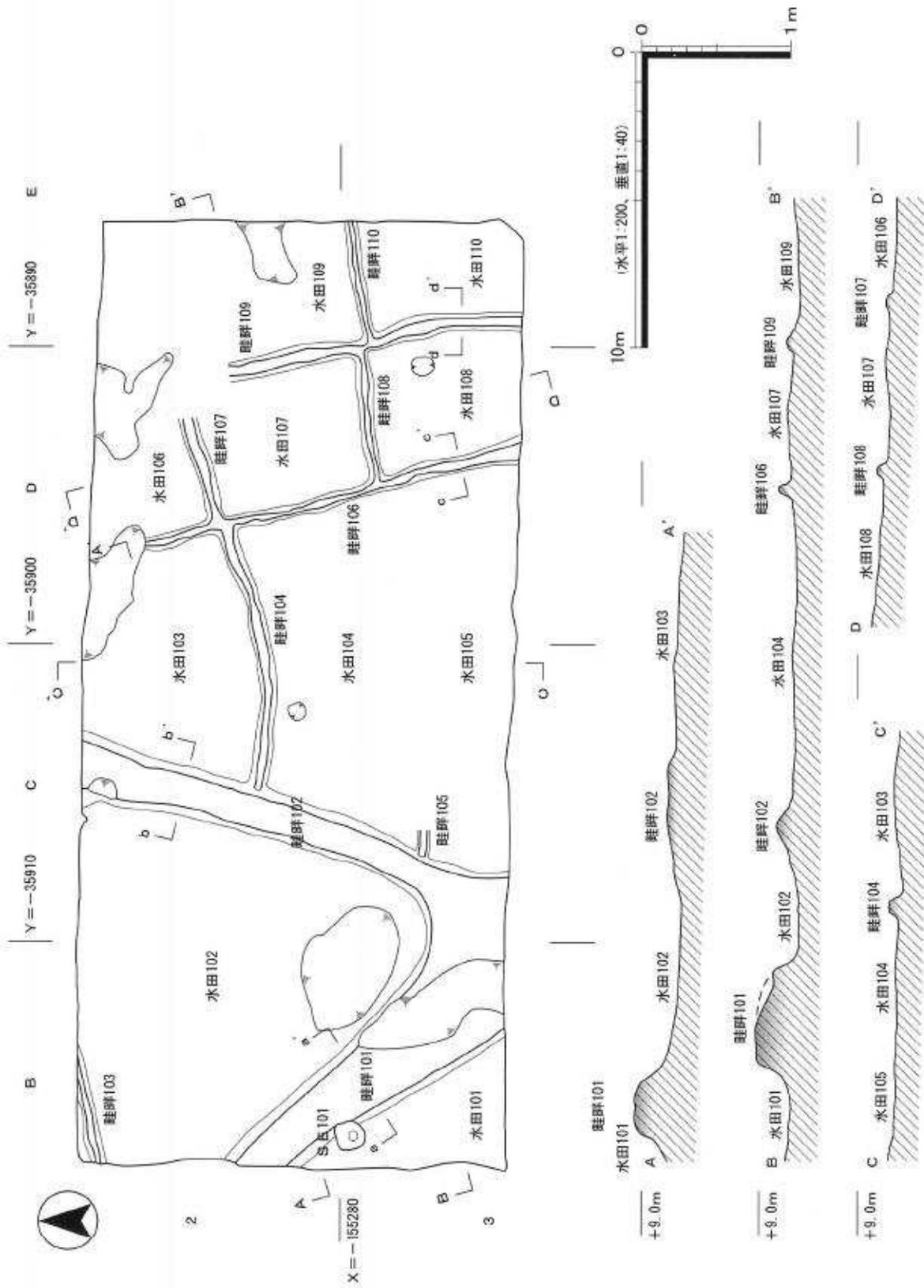
- イ 灰オリーブ色砂質シルト
- ロ 灰色砂質シルト
- ハ 灰白色砂質シルト
- ニ 灰白色粘土質シルト
- ホ 茶褐色砂質シルト(酸化鉄分顕著)
- ヘ 茶褐色砂質シルト
- ト 明青灰色シルト
- チ 黄褐色シルト
- リ 暗灰色細礫混じり粘土質シルト
- ヌ 灰白色粘土質シルト
- ル 茶褐色砂質シルト
- ヲ 不明

【S O 401埋土・開削に伴う盛土】

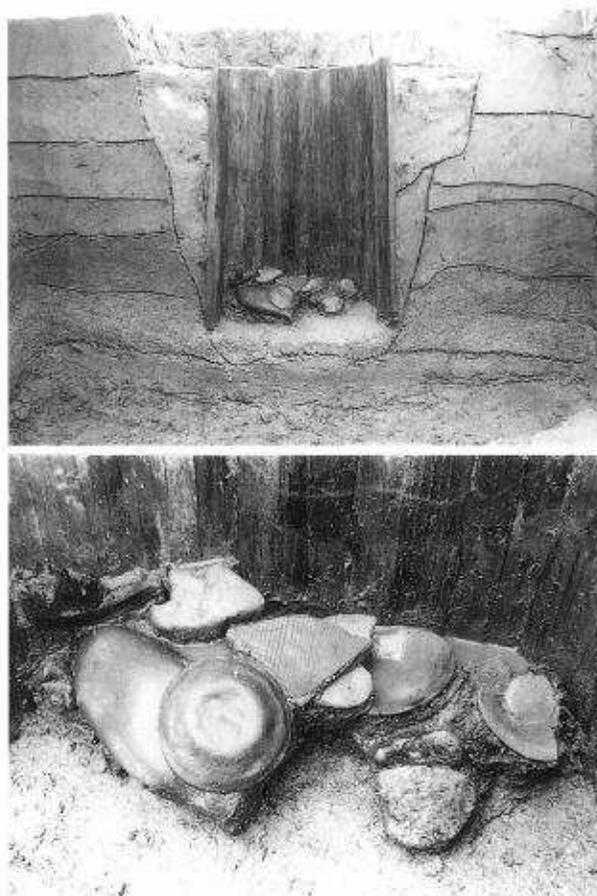
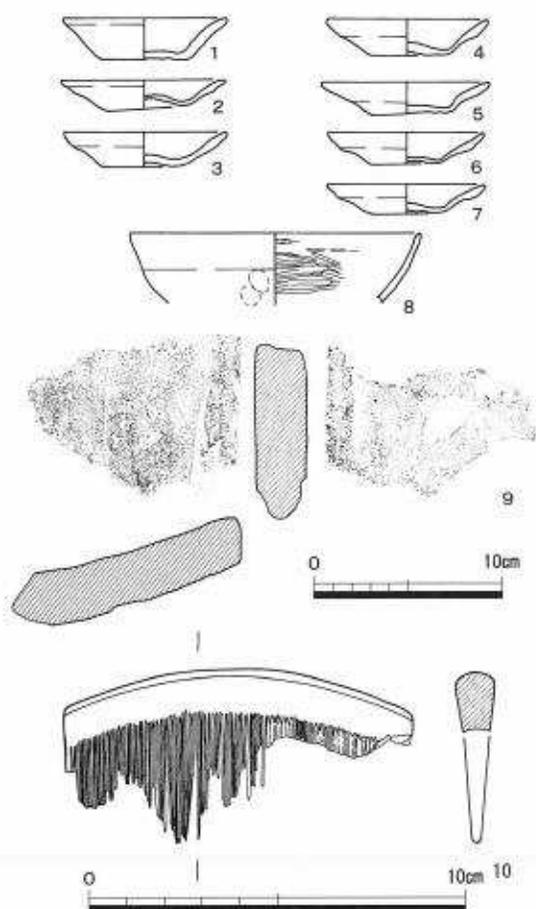
- ① 暗青灰色粘土質シルト(礫混じり)
- ② 褐色粘土質シルトに第26層・青灰色粘土のブロックが混じる
- ③ 灰色粘土質シルト灰色微砂の互層(上面に植物遺体)
- ④ 黄灰色細礫～粗粒砂に第26層のブロックが混じる
- ⑤ 第26層・灰白色のブロック
- ⑥ 第26層・灰色粗粒砂のブロック

※他の遺構埋土については本文中・各遺構挿図に記載

第3図 壁地層断面図



第4図 第1面検出遺構平面・断面図



第5図 SE101出土遺物実測図 (櫛1:2他1:4) 写真3 SE101断割り(上)・遺物出土状況(下)(東から)

第2表 SE101出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
1	土師器小皿	口径8.8・器高2.2・底径4.6	淡黄色	密長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	1/3, 手捏ね成形
2	土師器小皿	口径8.8・器高1.7・底径4.0	赤褐色	密長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	完形, 手捏ね成形
3	土師器小皿	口径8.8・器高2.0・底径3.7	オリーブ黄色	密長石・石英・雲母	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	完形
4	土師器小皿	口径8.7・器高1.7・底径4.1	オリーブ黄色	密長石・石英・雲母	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	完形
5	土師器小皿	口径9.1・器高1.6・底径4.1	淡黄色	密長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	1/2
6	土師器小皿	口径8.4・器高1.6・底径3.7	白灰色	密長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	1/2
7	土師器小皿	口径8.6・器高1.5・底径3.6	白灰色	密長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	ナデ	1/2
8	瓦器碗	口径15.6	黒灰色	密長石・石英	堅緻	口縁部ヨコナデ 体部指頭圧痕	ヘラミガキ	1/6
9	瓦平瓦	最大長11.3	灰色	粗い	良好	凸面布目	凹面縄目	

cm・器高1.4~2.2cmのものである。瓦器碗(8)の外面にはヘラミガキは認められない。横櫛(10)は一端を欠損するが復元幅10cm程度を測るもので、背の長さ1.2cm・歯の長さ3.5cmを測る。

水田遺構(第6・7図、写真4、第3・4表、図版2・9)

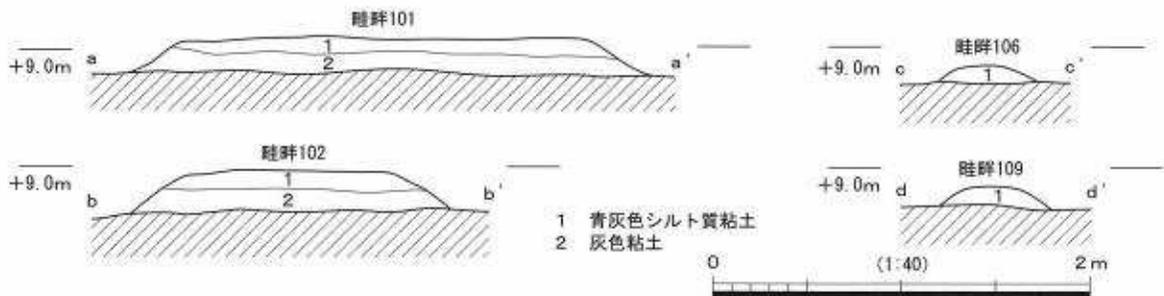
調査区の全域で水田10筆(水田101~水田110)、畦畔10条(畦畔101~畦畔110)からなる水田遺構が検出された。機械掘削時に第12層を取り除いた段階で、一部の畦畔の上面が確認できた。水田

第3表 第1面検出水田一覧表

遺構名	検出地区	上面の標高 (T.P.+)	備 考	参考
水田101	2~3 B	8.81~8.85m (北西が高い)	北東側を畦畔101により区画される。	
水田102	2~3 B・3 C	8.68~8.86m (南西が高い)	南西側を畦畔101・東側を畦畔102・北側を畦畔103により区画される。	
水田103	2 C・D	8.68~8.78m (西が高い)	西を畦畔102・南を畦畔104・東を畦畔106により区画される。	
水田104	2~3 C・D	8.71~8.86m (南西が高い)	西を畦畔102・北を畦畔104・南を畦畔105・東を畦畔106により区画される。	
水田105	3 C・D	8.79~8.87m	西を畦畔102・北を畦畔105・東を畦畔106により区画される。	
水田106	2 D	8.72m前後	西を畦畔106・南を畦畔107により区画される。	
水田107	2~3 D	8.76m前後 (平坦)	西を畦畔106・北を畦畔107・南を畦畔108・東を畦畔109により区画される。 小区画水田の1筆をほぼ確認。	図版2
水田108	3 D・E	8.78~8.86m (南西が高い)	西を畦畔106・北を畦畔108・東を畦畔109により区画される。	
水田109	2~3 D・E	8.68~8.74m (北西が高い)	西を畦畔109・南を畦畔110により区画される。	
水田110	2~3 B	8.70~8.79m (南が高い)	西を畦畔109・北を畦畔110により区画される。	

第4表 第1面検出畦畔一覧表

遺構名	検出地区	上面の標高 (T.P.+)	備 考	参考
畦畔101	2~3 B	8.96~9.70m (南が高い)	調査区南端で畦畔102と接続。水田101と水田102を区画。	第6図
畦畔102	2~3 C	8.66~9.10m (北が高い)	畦畔101から分岐。水田102と水田103・水田104・水田105を区画。	第6図
畦畔103	2 B	8.76~8.80m (西が高い)		
畦畔104	2 C・D	8.75~8.90m (西が高い)	畦畔102から分岐。水田103と水田104を区画。	
畦畔105	3 C	8.75~8.90m (西が高い)	畦畔102から分岐。水田104と水田105を区画。	
畦畔106	2~3 D	8.75~8.92m (南が高い)	畦畔104・畦畔107・畦畔108と接続。水田103・水田104と水田106・水田107・水田108を区画。	第6図
畦畔107	2 D	8.75m前後 (西が高い)	畦畔106に直角に接続。水田106と水田107を区画。	
畦畔108	3 D	8.80~8.88m (西が高い)	畦畔106にほぼ直角に接続。水田107と水田108を区画。	
畦畔109	2~3 D・3 E	8.75~8.87m (南が高い)	畦畔108・畦畔110と接続。水田107・水田108と水田109と水田110を区画。	第6図
畦畔110	3 E	8.75m (東が高い)	畦畔109に直角に接続。水田109と水田110を区画。	



第6図 畦畔101・畦畔102・畦畔106・畦畔109断面図

面全体を第12層が覆っていたために、水田の遺存状態は比較的良好であった。

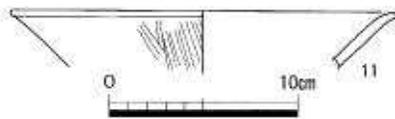
水田は、大畦畔に分類される畦畔101・畦畔102を基軸にして、畦畔102に並行する小畦畔と直交する小畦畔を配して、方形の小区画水田を展開しているとみられる。第14層を耕土とする。

水田上面の標高は、調査区西部の大畦畔(畦畔101・畦畔102)近くが高く、T.P.+8.85~8.9m前後である。調査区全体では、南西から北東方向に向かって落ちており、北東部での標高はT.P.+8.65~8.75mを測る。

調査区内で確認した水田の平面形は、方形(水田106~水田110)・台形(水田103~水田104)・三角形(水田102)などで、一筆耕地が確認できた水田の田積は水田104が52.5㎡、水田107が22.5㎡を測る。水田の灌漑施設などは確認できなかった。水田面上および畦畔上に無数の人の足跡が点



写真4 水田106検出足跡群(西から)



第7図 畦畔101内出土遺物実測図

在することや、耕作土の下部層に鉄分・マンガンの集積層が形成されていないことから、半乾田水田と推定される。各水田の検出地区・上面の標高等については第3表に示した。

畦畔は元々の地形を利用して、第14層上に第14層を盛り上げることによって構築されている。調査区西部で検出された大畦畔2条(畦畔101・畦畔102)と調査区東部で検出された小畦畔(畦畔103～畦畔110)に分けられ、小畦畔は小区画水田を区画する。大畦畔のうち畦畔101が最も規模が大きく基底幅1.0～1.8m・上面幅0.6～1.6m・畦畔高0.2mを測る。畦畔102は基底幅0.7～1.3m・上面幅0.5～0.8m・畦畔高0.2mを測る。小畦畔の規模は、基底幅0.4～0.8m・上面幅0.2～0.5m・畦畔高5～10cmを測る。畦畔の断面形状は、大畦畔が台形、小畦畔は半円形である。畦畔上面の標高はT.P.+8.75～9.05mで、全体的には南北では南が高く、東西では西が高い。各畦畔の検出地区・上面の標高等については第4表に示した。

畦畔盛土内の出土遺物は、畦畔101の畦畔102との分岐点近くの盛土内から土師器(11)が1点出土した。11は高杯である。杯部の口縁部の1/7が残存する。調整は外面にヨコナデ・ハケ、内面はナデを施す。胎土は粗く、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。

・第2面(第8図、図版3)

第2面は第17層上面(T.P.+8.5m前後)において古墳時代中期以降の水田遺構である水田3筆(水田201～水田203)、畦畔5条(畦畔201～畦畔205)を検出した。

水田遺構(第9図、第5・6表)

調査区の全域で水田3筆(水田201～水田203)と水田を区画する畦畔5条(畦畔201～畦畔205)からなる水田遺構を検出した。

水田は、概ね南北方向に軸をとる大畦畔により区画される。調査区内での水田1筆の区画は不明である。水田上面の標高は、南北方向では南が高く、東西方向では西が僅かに高い。水田の灌溉施設などは確認できなかった。水田は、第17層を耕土とする。水田の種類は耕作土の下部層に鉄分・マンガンの集積層が形成されていないことから、第1面の水田と同じく半乾田水田であったと推定される。

畦畔は、第1面と同様、元々の地形の高い所を利用して構築されており、第18層上に第18層を主体とする土を盛り上げることによって構築されている。いずれも大畦畔に分類されるものである。その中でも畦畔201・畦畔203・畦畔205は大規模なもので、調査区南側で接続している可能性がある。畦畔202・畦畔204はこれらに取り付く畦畔の可能性はある。

畦畔内出土遺物(第10図、第7表、図版4・9)

畦畔203の盛土内から、土器を主体とする遺物が出土した。検出レベルは、畦畔上面から約10cm下のT.P.+8.6m前後である。出土遺物の中から土師器高杯1点(12)・須恵器杯身1点(13)・土師器複合口縁壺2点(14・15)・布留式甕2点(16・17)を図化した。壺・甕は、いずれも口縁部～体部上半までしか遺存していないが、体部下半を打ち欠いたものかは不明である。

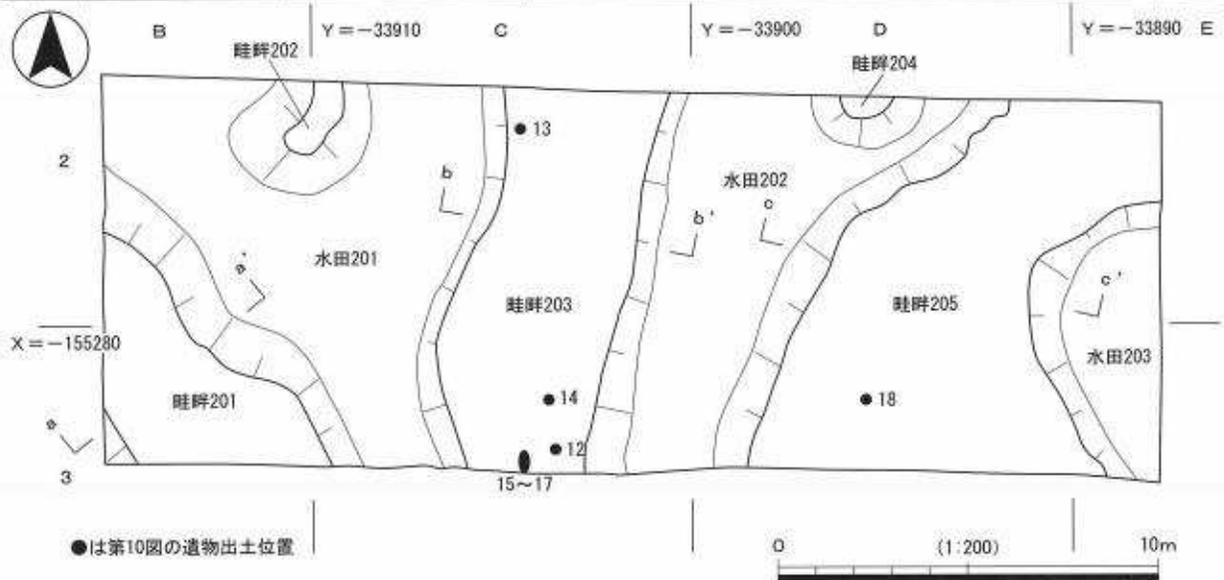
畦畔205の盛土内からも、土器を主体とする遺物が出土した。南部の西寄りでは、口縁部を北に向け、横に寝かせた状態の土師器複合口縁壺1点(18)が出土した。検出レベルは、畦畔上面か

第5表 第2面検出水田一覧表

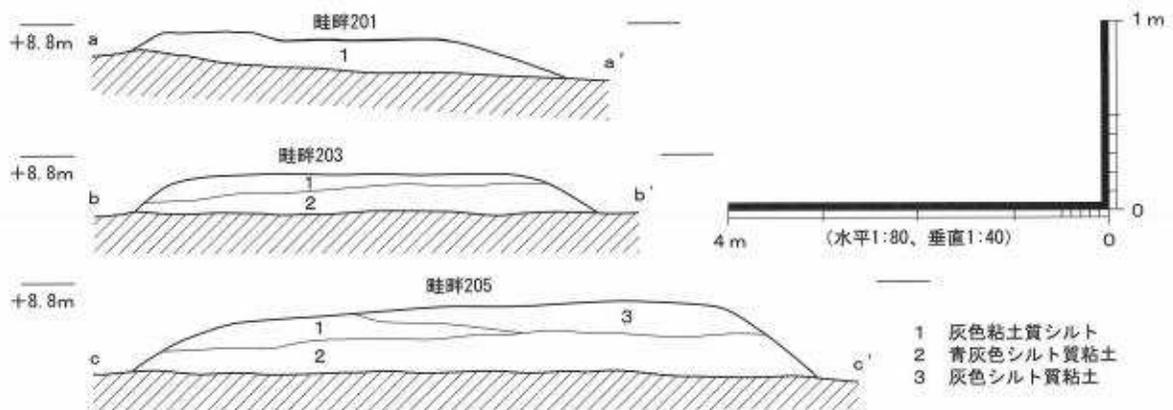
遺構名	検出地区	上面の標高 (T.P.+)	備 考	参考
水田201	2~3 B・2~3 C	8.4m前後 (上面は平坦)	南西側を畦畔201・東側を畦畔203によって区画される。	
水田202	2~3 C・2~3 D	8.5m前後(西が僅かに高い)	西側を畦畔203・東側を畦畔205によって区画される。	
水田203	2~3 E	8.5m前後(西が僅かに高い)	西側・北側を畦畔205により区画される。	

第6表 第2面検出畦畔一覧表

遺構名	検出地区	上面の標高 (T.P.+)	備 考	参考
畦畔201	2~3 B・3 C	8.7~8.75m (南が高い)	水田201を区画。第1面の畦畔101とほぼ同位置で重なる。	第13図
畦畔202	2 B・C	8.54~8.62m (南が高い)		
畦畔203	2~3 C	8.65~8.75m (南が高い)	水田201と水田202を区画。	第13図
畦畔204	2 D	8.55m		
畦畔205	2~3 D・2~3 E	8.63~8.71m (南が高い)	水田202と水田203を区画。	第13図



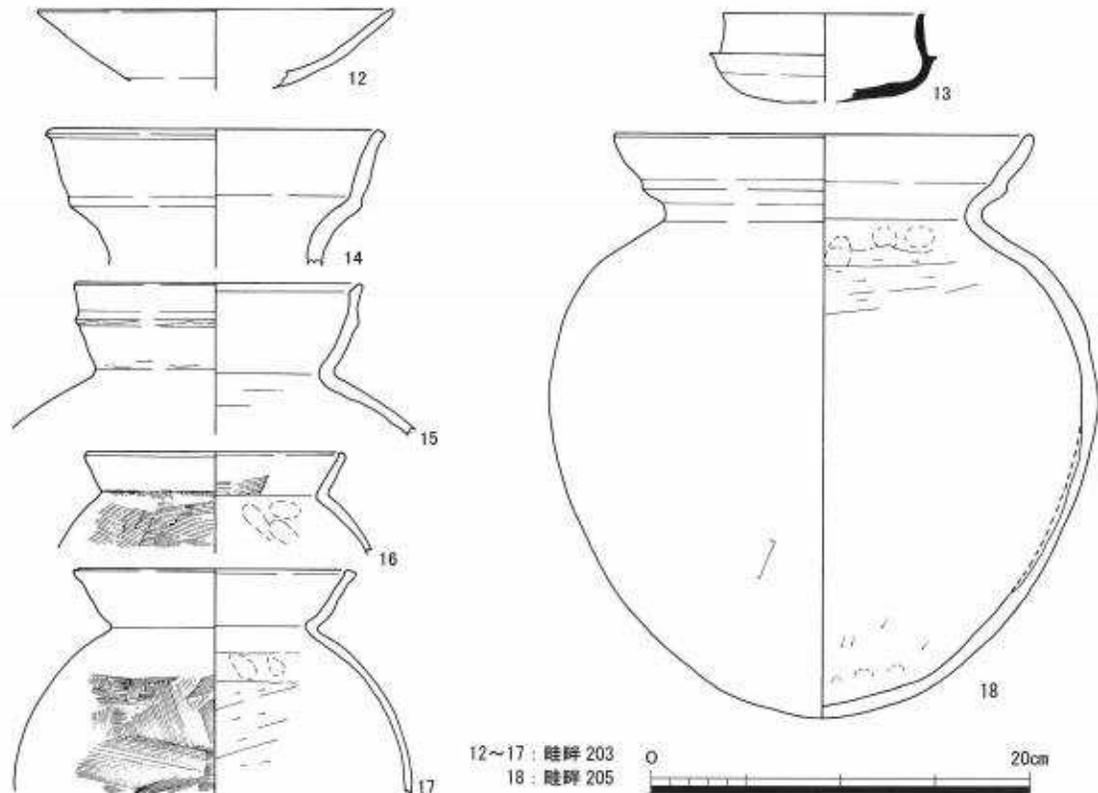
第8図 第2面検出遺構平面図



第9図 畦畔201・畦畔203・畦畔205断面図

ら約20cm下のT.P.+8.6m前後である。

第2面水田の時期は、土師器・須恵器の年代観から古墳時代中期(5世紀中葉)以降に位置づけられる。下位層の第19層からは弥生時代後期~古墳時代前期後半(布留式新相)の遺物を多く含んでおり、第1面水田の時期が古墳時代後期に比定されるので水田の構築時期がある程度限定される。



第10図 畦畔203・畦畔205内出土遺物実測図

第7表 畦畔203・畦畔205出土遺物観察表

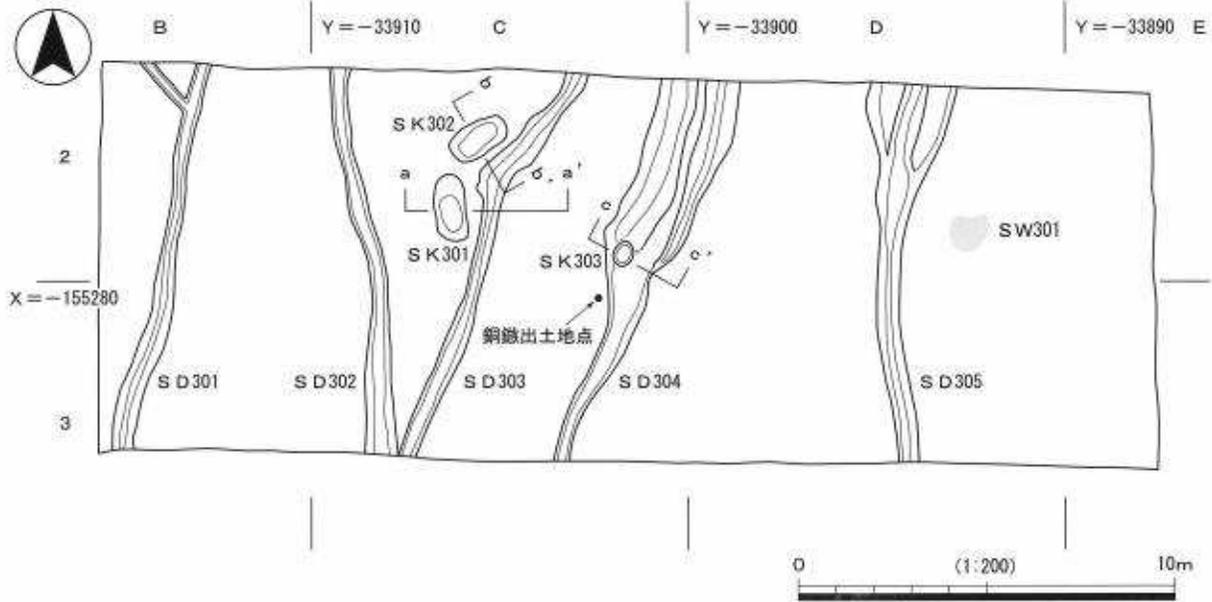
番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
12	畦畔203	土師器壺	口径17.9	淡灰褐色	粗い	良好	ヨコナデ		口縁部の1/3
13	畦畔203	土師器壺	口径15.2	淡黄色	密	良好	ヨコナデ		口縁部
14	畦畔203	土師器甕	口径13.8	灰褐色	密	良好	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ	口縁部の2/3、煤付着
15	畦畔203	土師器布留式甕	口径14.9 体部最大径21.0	暗灰褐色	密	良好	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ケズリ	口縁～体部の1/3、煤付着
16	畦畔203	土師器高杯	口径18.7	淡乳褐色	密	良好	ヨコナデ		杯部の3/4、黒斑あり
17	畦畔203	須恵器杯身	口径10.7 受部径12.1	灰青色	密	良好	回転ナデ・回転ケズリ		2/3
18	畦畔205	土師器壺	口径22.1 器高31.5 体部最大径28.8	橙褐色	粗い	良好	ヨコナデ		1/2

・第3面(第11図、図版5)

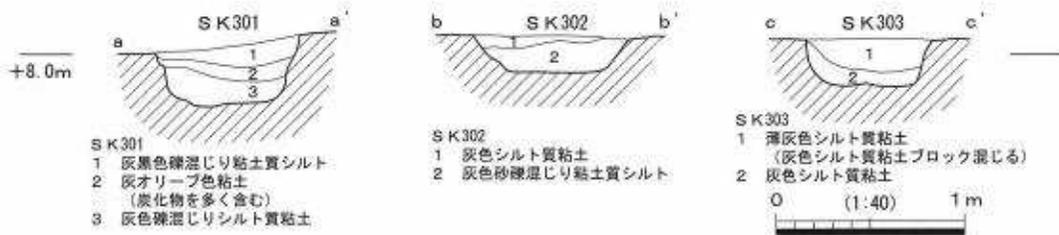
第3面は、第19層を除去した面(第20層上面、T.P.+8.0m前後)である。検出された遺構は、弥生時代後期後葉の土坑3基(S K 301～S K 303)、溝5条(S D 301～S D 305)、土器集積1箇所(S W 301)である。第3面では、水田に伴う畦畔などは検出されなかった。

土坑(S K 301～S K 303)(第12図、第8表、図版5)

第3面で検出された土坑は3基(S K 301～S K 303)である。調査区中央部の西よりで検出された。検出地区・検出部分での規模・形状等については第8表に、埋土については第12図に示した。いずれの土坑も埋土からの出土遺物はない。いずれも明瞭な掘形を持ち、埋土はブロック土を主体とする。



第11図 第3面検出遺構平面図



第12図 第3面検出土坑断面図

第8表 第3面検出土坑一覧表

遺構名	検出地区	検出規模 (m)	埋土・断面形状	備考
S K 301	2 C	長さ0.9・幅0.42・深さ0.3	第12図	溝との切り合いは不明
S K 302	2 C	長さ0.8・幅0.5・深さ0.4	第12図	溝との切り合いは不明
S K 303	2 C	直径0.35・深さ0.5	第12図	S D 304を切る。

第9表 第3面検出溝一覧表

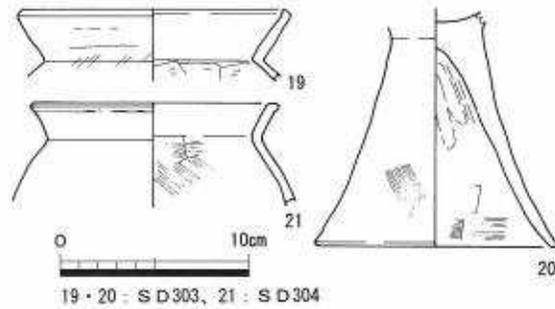
遺構名	検出地区	検出規模 (m)	断面形状	埋土	出土遺物	備考	参考
S D 301	2~3 B	幅0.4・深さ0.6	椀形	灰色シルト質粘土	なし	調査区北部で分岐。	
S D 302	2~3 C	幅0.4~0.8・深さ0.3	皿形	灰色シルト質粘土	なし		
S D 303	2~3 C	幅0.4~0.8・深さ0.1	皿形	灰色シルト質粘土	甕 (22) 高杯 (23)	調査区南端で S D 302と接続する。	第13図
S D 304	2~3 C・2 D	幅0.4~2.2・深さ0.2	皿形	灰オリーブ色粘土質シルト	甕 (24)	S K 303に切られる。	第13図
S D 305	2~3 D	幅0.5~2.3・深さ0.3	逆凸字形	上位から、灰色シルト質粘土・灰色小礫混じり粘土質シルト・灰オリーブ色粗砂	なし		

溝 (S D 301~S D 305) (第13図、第9・10表、図版5・10)

第3面で検出された溝は5条 (S D 301~S D 305) である。いずれの溝も概ね南北方向に伸びる。検出地区・検出部分での規模・断面形状・埋土等については第9表に、出土遺物については第13図・第10表に示した。

第3面で検出した遺構の帰属時期は、検出面を覆っている第19層から弥生時代後期から古墳時代前期後半 (布留式新相) にかけての遺物が多く出土していることと、S D 303・S D 304の埋土出土遺物などから判断して弥生時代後期後葉に比定される。

これらの溝が水田耕作に伴う溝であるかは不明である。



第13図 S D 303・S D 304出土遺物実測図

第10表 S D 303・S D 304出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
19	S D 303	土師器 甕	口径14.5	黒褐色	密 長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 体部ハケナデ	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	1/6、外面煤付着
20	S D 304	土師器 高杯	底径12.8	黒褐色	密 長石・石英	良好	ハケナデ	ユビナデ・ケズリ	3/4
21	S D 304	土師器 甕	口径13.2	橙色	密 長石・石英	良好	口縁部ヨコナデ 体部ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	1/8

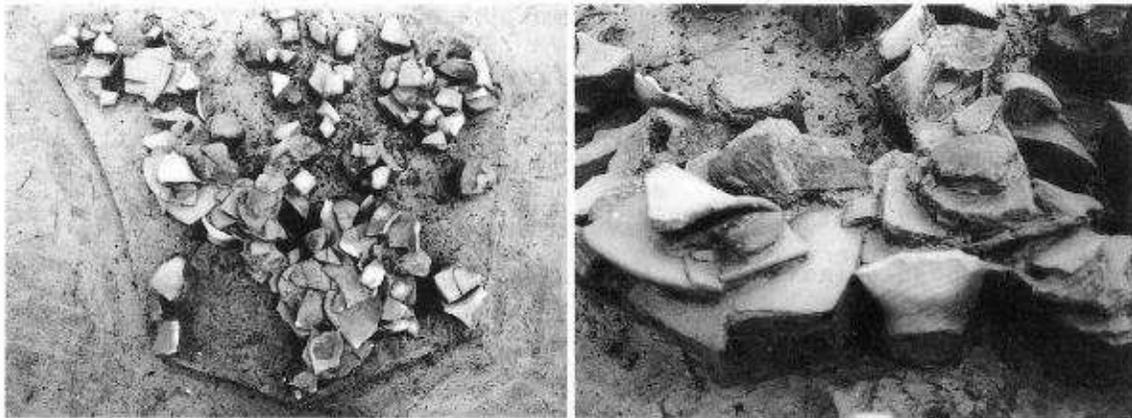


写真5 S W 301遺物出土状況 (左：西から、右：北西から)

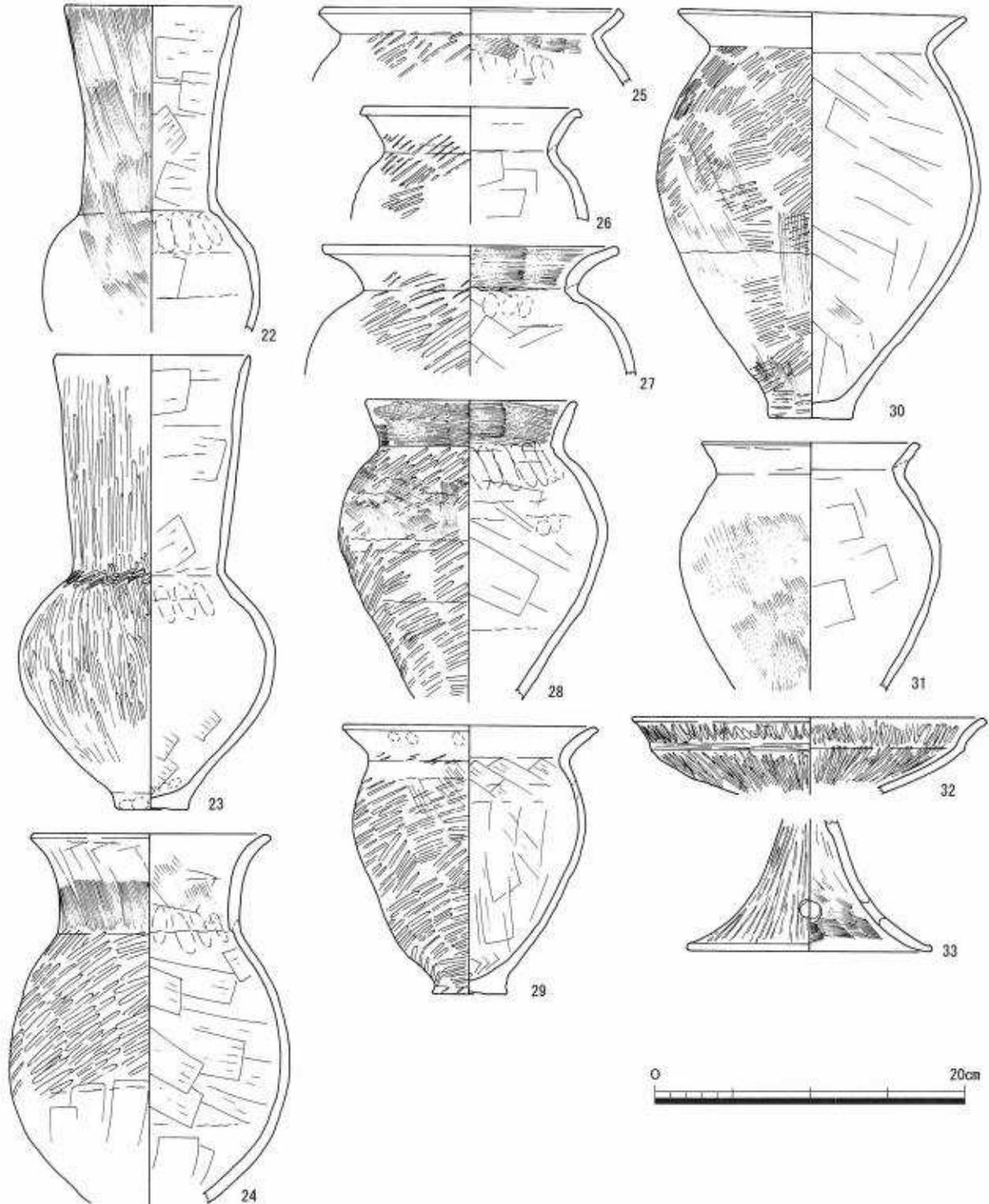
第11表 S W 301出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
22	弥生土器 長頸壺	口径11.5 体部径14.1	オリーブ色	密 長石・石英	良好	ハケナデ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヘラナデ	4/5
23	弥生土器 長頸壺	口径12.7 器高29.4	褐色	密 長石・石英	良好	ヘラミガキ頸部に波状文	ヘラケズリ・ヘラナデ	4/5、内外面とも煤付着
24	弥生土器 短頸壺	口径15.7 体部径18.2	橙色	密 長石・石英・雲母	良好	ヨコナデ	ハケナデ	1/3
25	弥生土器 甕	口径19.8	橙色	密 長石・石英・雲母	良好	ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ・ユビオサエ	1/4
26	弥生土器 甕	口径14.3	黄橙色	密 長石・石英	良好	ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ・ヘラナデ	1/3、煤付着
27	弥生土器 甕	口径19.2	橙色	密 長石・石英・チャート	良好	ヨコナデ・タタキ	ハケナデ	2/3
28	弥生土器 甕	口径13.7 体部径17.4	黄褐色	密 長石・石英	良好	ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ	4/5
29	弥生土器 甕	口径16.5 器高17.3	黄橙色	密 長石・石英・雲母	良好	ハケナデ	ヨコナデ	1/3
30	弥生土器 甕	口径18.4 体部径20.3	橙色	密 長石・石英・雲母	良好	ナデ・タタキ	ナデ	ほぼ完形、煤付着
31	弥生土器 甕	口径14.2 体部径17.0	淡黄色	密 長石・石英	良好	ヨコナデ・ハケナデ	ヨコナデ・ハケナデ	1/3
32	弥生土器 高杯	口径23.0	淡黄色	密 長石・石英・チャート	良好	ヘラミガキ	ヨコナデ	3/4
33	弥生土器 高杯	底径15.7	淡黄色	密 長石・石英	良好	ヘラミガキ	しほり目ハケナデ	3/4

土器集積(SW301)

SW301(第14図、第11表、図版10~12)

調査地東部の2D地区で検出した。第3面の精査時に第19層中でその上面を確認した。東西幅1.4m、南北幅1.2mの範囲に土器の破片が集積した状態にあり、掘形などは検出されなかった。土器を一括して投棄したものとみられる。出土遺物の中から12点(22~33)を図化した。



第14図 SW301出土遺物実測図

・第4面(第15図)

第4面は、下部調査のため設定した北・南トレンチのうち南トレンチにおいて、第25層までを除去した面(T.P.+7.3~7.8m)である。弥生時代後期以前の溝1条(SD401)・落込み1箇所(SO401)が検出された。

溝(SD401)

SD401(第3図、図版6)

トレンチ中央部の2~3C・D地区で検出された。SO401の底面で開削されているもので、南北方向に伸びる。北側・南側がトレンチ外に至るため全長は確認できない。検出部分での幅2.7m、深さ1.2mを測る。断面形状は逆台形を呈している。埋土は4層に分けられ、粘土質シルトと微砂の互層からなる1層(第3図-③)を除き、ブロック土を含む。ちなみに、埋土の④は写真撮影後に除去しており、写真(図版6)は埋土の③までを除去した状態のものである。SD401の両肩には開削時の排土と見られる基盤層のブロック土(⑤・⑥)が堤状の盛土として堆積することが壁断面から確認できる。ちなみに、開削時の排土⑤・⑥は第4面検出時に除去しており、平面的には検出されていない。出土遺物はない。

落込み(SO401)

SO401

トレンチ西端を除く2~3B・C・D・E地区で検出された。調査区西から中央に向かって緩やかな階段状に落ち込むもので、底面は平坦である。西肩を除きトレンチ外に至るため全容は確認できない。検出幅23.5m、深さ0.4mを測る。埋土は微砂と粘土質シルトの互層(第23層~第25層)で、埋土の上面には植物遺体が多く堆積する。出土遺物はない。

SD401東側の落込みの底面でヒトの足跡を検出している。東から西に向かって歩行していることが確認できる。足跡は第26層の上面で検出され、SD401が開削される以前のものである。また、調査区東部の2~3D地区では基底幅1.0mほどの畦畔状の盛上りが検出されている。

ちなみに、埋土の上面に堆積する植物遺体はSD401の埋土③の上面に堆積する植物遺体に対応し、埋土③は第23層に対応する。このことから、SD401はSO401の埋没後も溝状の窪みとして存在しており、最終的に埋土①・②により人為的に埋められたと考えられる。

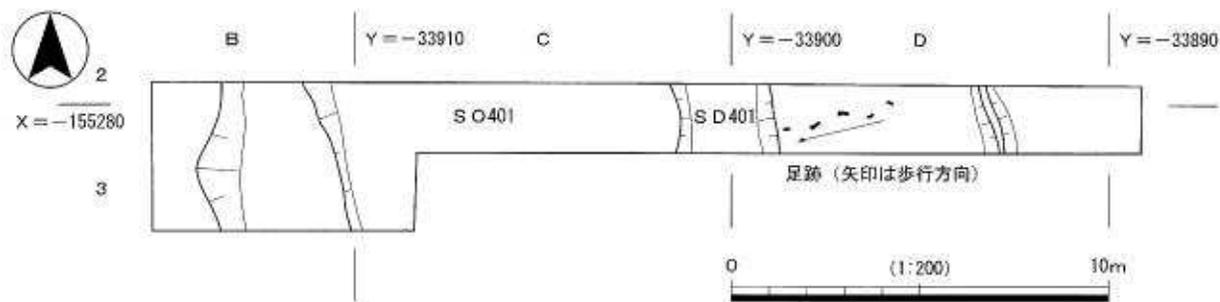
・第5面(第16図、図版7)

第5面は、第4面と同じく南トレンチにおいて、第26層までを除去した面(T.P.+7.0~7.8m)である。弥生時代中期ないし後期の落込み1箇所(SO501)・河川1条(NR501)が検出された。

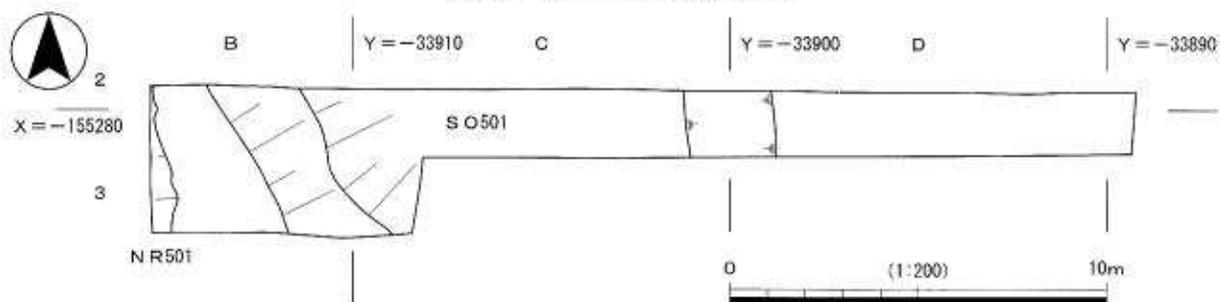
落ち込み(SO501)

SO501(図版7)

トレンチ西端を除く2~3B・C・D・E地区で検出された。西から東に向かって緩やかに落ち込む。西肩を除きトレンチ外に至るため全容は確認できない。検出幅24.6m・深さ0.8mを測る。埋土は灰色微砂。出土遺物は、図化できなかったが弥生時代中期(櫛描文)の土器小片1点が出土している。



第15図 第4面検出遺構平面図



第16図 第5面検出遺構平面図

河川(NR501)

NR501

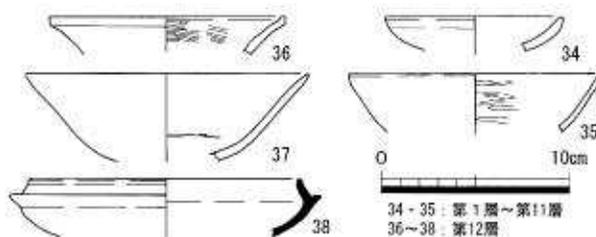
トレンチ西端の3B地区で検出した。東肩のみを検出したもので、全容は確認されなかった。深さ0.2m以上を測る。埋土は上層：粗粒砂を多く含んだ暗灰色シルト質粘土、下層：淡青灰色微砂である。遺物は出土していない。

2) 遺構に伴わない出土遺物

・第1層～第11層(機械掘削時)出土遺物

(第17図、第12表、図版12)

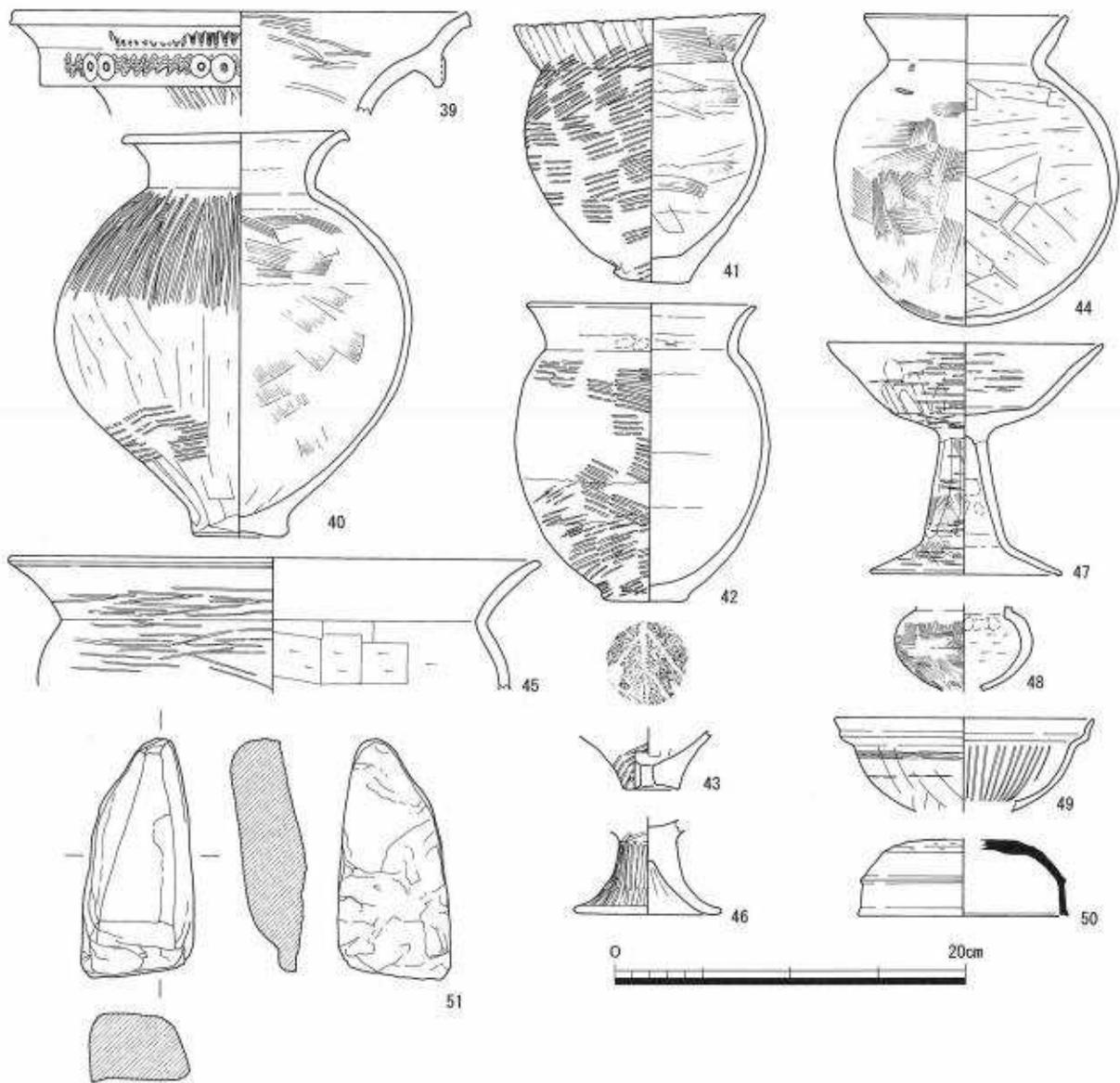
第1層から第11層までを機械掘削で除去した際、排土から中世の土器の破片を主体とする遺物が少量出土している。正確な出土層位・遺構は不明である。その中から2点(34・35)を図化した。



第17図 第1層～第11層・第12層出土遺物実測図

第12表 第1層～第11層・第12層出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
34	第1～11層	土師器 小皿	口径9.5	淡灰褐色	密	良好	ヨコナア	ヨコナア	1/6, 煤付着
35	第1～11層	瓦器 椀	口径13.5	乳灰色	密	良好	ヨコナア	ヘラミガキ	口縁部
36	第12層	土師器 庄内式甕	口径12.6	灰茶褐色	粗い	良好	ヨコナア	ハケ	口縁部の1/8
37	第12層	土師器 高杯	口径15.0	茶褐色	密	良好	ヘラミガキ		裾部の1/5
38	第12層	須恵器 杯身	口径14.2 受部径16.6	灰青色	密	良好	回転ナア		1/8



第18図 第15層出土遺物実測図

・第12層出土遺物(第17図、第12表、図版12)

第1面検出時に第12層から土器(土師器・須恵器)の破片が少量出土している。その中から3点(36~38)を図化した。

・第15層出土遺物(第18図、第13表、図版13・14)

第15層からは古墳時代中期までの土器主体とする遺物が出土している。他に石が出土している。その中から13点(39~51)を図化した。

・第19層出土遺物(第20・21図、写真7・8、第14表、図版14~17)

第19層からは土器を主体とする遺物が出土している。他に石や後で記載する銅鏃が出土している。遺物の示す相対年代は弥生時代後期後葉~古墳時代前期と幅があり、かつ残存率も高いことから、第19層上面ないし第19層層中の遺構埋土に帰属するものが含まれている可能性が高い。その中から20点(52~71)を図化した。

第13表 第15層出土遺物観察表

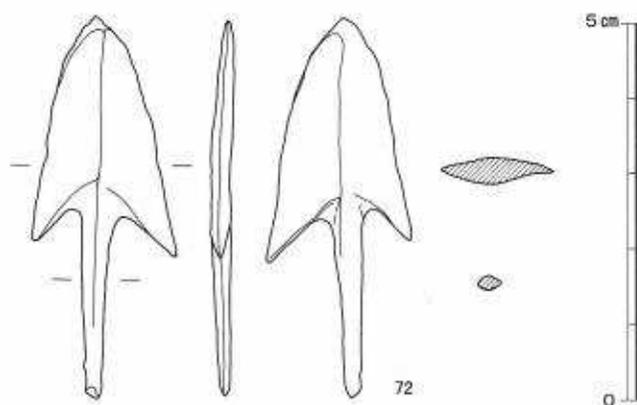
番号	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
39	土師器 壺	口径26.3	淡茶灰色	密	良好	ヨコナデ・ヘラミガキ 波状文・円形浮文	ヘラミガキ	口縁部の1/6
40	弥生土器 短頸壺	口径13.1 器高23.3 底径5.5	茶褐色	密	良好	タタキ後ヘラミガキ	ナデ	完形
41	弥生土器 壺	口径14.4 器高15.1 底径4.4	茶橙色	密	良好	タタキ・指ナデ	板ナデ	2/3
42	弥生土器 甕	口径13.2 器高17.1 底径4.9	灰茶褐色	粗	良好	ヨコナデ・タタキ 底部に木葉痕	ヨコナデ	1/2煤付着
43	弥生土器 甕	底径3.3	淡茶灰色	密	良好	タタキ後ナデ	ナデ	底部のみ、穿孔あり
44	土師器 布留式甕	口径11.7 器高17.7 体部径16.2	淡茶橙色	密	良好	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	完形
45	土師器 鉢	口径30.6	褐色	密	良好	ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ナデ	口縁部の1/5
46	弥生土器 台付鉢	脚部径8.5	茶灰色	密	良好	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	脚部完存
47	土師器 高杯	口径16.5 裾径11.0	明黄褐色	密	良好	ヘラミガキ、脚部は面取り後 ハケ・ヘラミガキ	ナデ	1/3
48	土師器 小型丸底壺	体部径7.8	茶褐色	粗い	良好	ナデ・ハケメ	ヘラケズリ・ナデ	体部の1/4煤付着
49	土師器 鉢	口径14.9	茶橙色	密	良好	ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヨコナデ	1/7
50	須恵器 杯蓋	口径12.2	淡灰色	密	良好	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	1/5
51	石	長辺13.7 短辺6.5	乳茶灰色	—	—	—	—	砥石?

・第19層出土銅鏃(第19図、写真6、図版17)

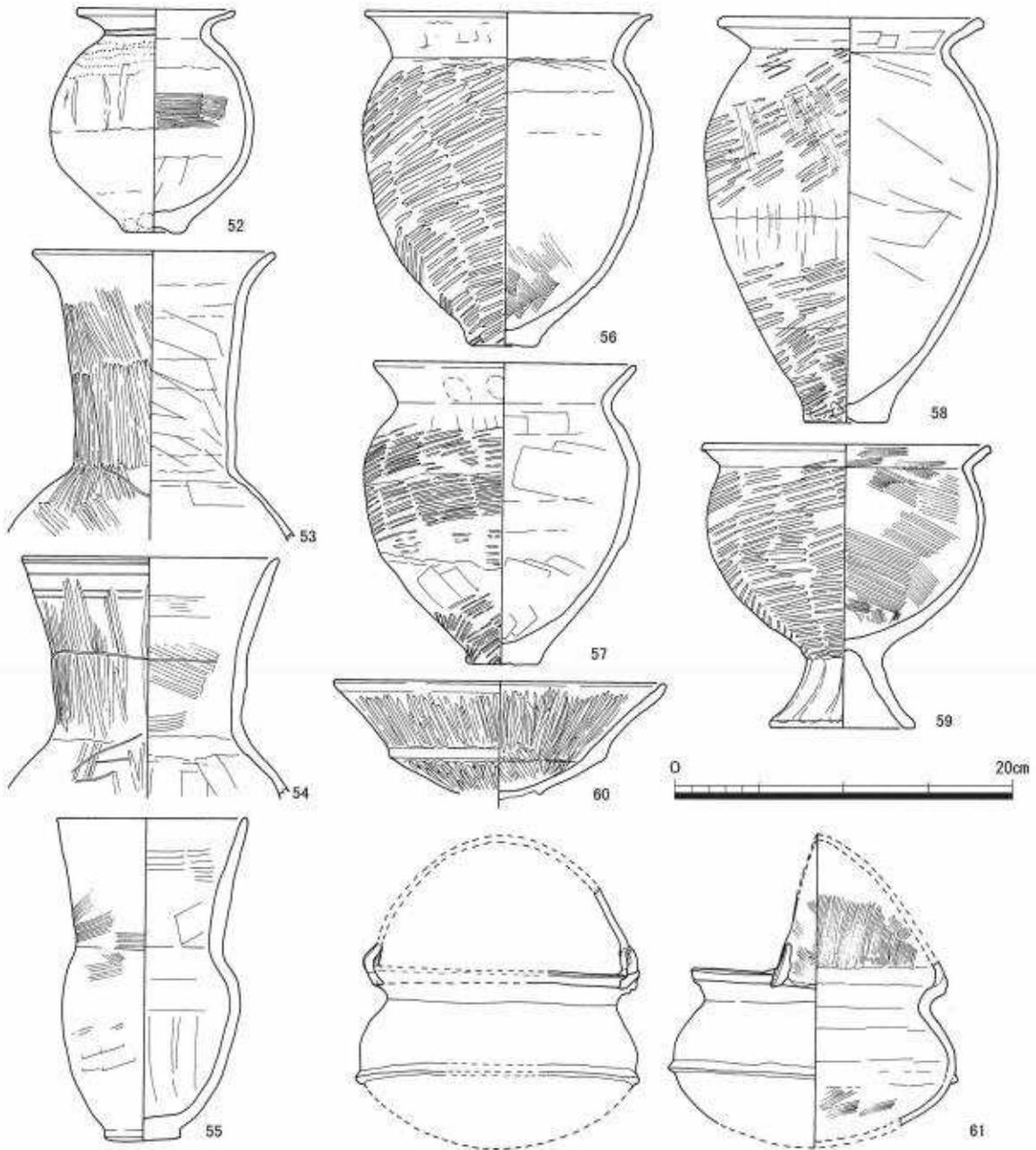
第19層からは土器・石の他に銅鏃1点(72)が出土している。72は第3面精査中の第19層内3C地区で出土した。72は茎のつく有茎鏃の凹基式で鏃身の平面形態が縦長の二等辺三角形状である。鏃・茎の断面形状は菱形に近くよく研磨されており、切先・逆刺が非常に鋭い。72は全長5.0cm、鏃身最大幅1.9cm、茎長2.4cm、最大厚0.4cmを測る。色調は赤銅色で、出土時は酸化の進んでいない10円玉硬貨の色調をしており、遺存状態は良好である。鏃身の両面の数ヶ所に繊維、漆状のものが付着している。72は時期的に弥生時代後期に属するとみられ、田中分類のB-b-2型式に入る。鏃身幅指数 $\langle(\text{鏃身幅} \div \text{長さ}) \times 100\rangle$ は38である。形態的な特徴からみた近似資料は亀



写真6 第19層内銅鏃出土状況(北西から)



第19図 第19層出土銅鏃実測図(1:1)



第20図 第19層出土遺物実測図①

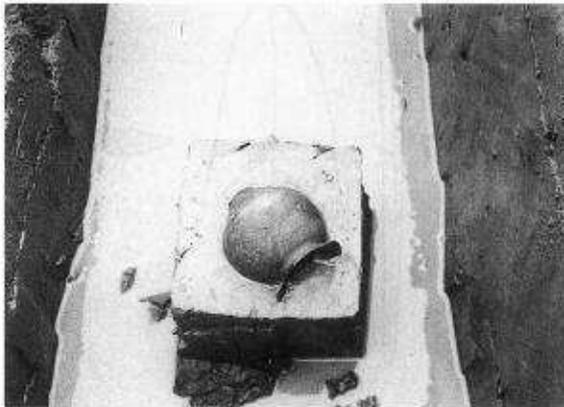
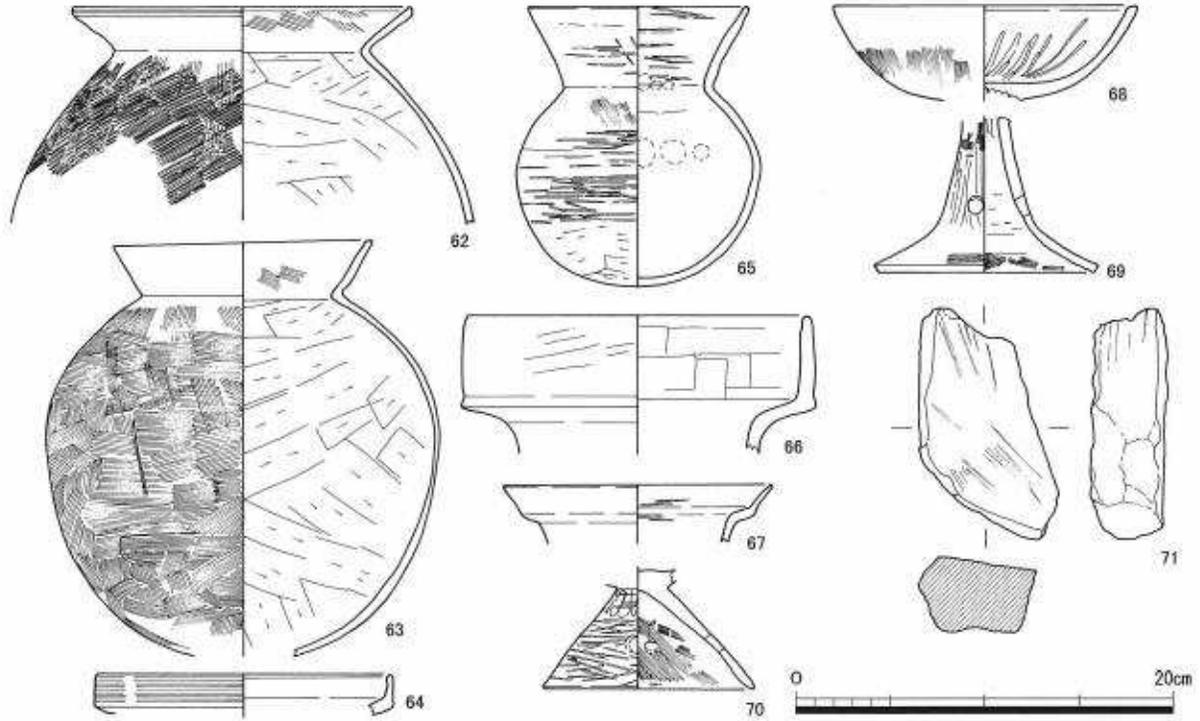


写真7 第19層内甕出土状況(南から)



写真8 第19層内手焙り形土器出土状況(上が東)



第21図 第19層出土遺物実測図②

第14表 第19層出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	残存率・備考
52	弥生土器 広口壺	口径9.5 器高13.3	赤褐色	粗	良好	ヨコナデ 朱塗り	ナデハケ	完形 体部上半に列点文
53	弥生土器 長頸壺	口径15.3	淡茶灰色	密	良好	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラナデ	線刻あり
54	弥生土器 長頸壺	口径14.6	橙茶灰色	密	良好	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラナデ	線刻あり
55	弥生土器 長頸壺	口径11.4 器高19.3	淡茶橙色	密	良好	ハケ・ヨコナデ	ヘラナデ	完形
56	弥生土器 V様式甕	口径15.9 器高24.1	淡灰褐色	密	良好	タタキ・ナデ	ヨコナデ	1/2、煤付着
57	弥生土器 甕	口径17.2 器高19.8	褐色	密 長石・石英・雲母	良好	ナデ・タタキ	ナデ	3/4
58	弥生土器 甕	口径15.8 器高17.9	黄褐色	密 長石・石英・雲母	良好	ナデ・タタキ	ナデ	1/2
59	弥生土器 台付甕	口径17.3 器高16.8 脚径8.6	褐灰色	密	良好	ナデ・タタキ	ナデ・ハケ	1/2
60	弥生土器 高杯	口径19.4	赤褐色	密 長石・石英・雲母	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	煤付着
61	弥生土器 手焙り形土器	口径15.2 胴径16.7	淡橙灰色	密	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ヨコナデ	1/2
62	土師器 庄内式甕	口径18.1	褐灰色	密	良好	ヨコナデ タタキ・ハケ	ナデ	1/3
63	土師器 甕	口径13.8 体部径20.9	茶橙色	密	良好	ハケ・ヨコナデ	ハケ ヘラケズリ	1/2
64	土師器 甕	口径15.8	淡茶灰色	密	良好	ナデ 口縁部櫛掻き	ナデ	1/4、吉備地方産
65	土師器 小型壺	口径11.8 器高14.8	灰褐色	密	良好	ナデ・ハケ ヘラミガキ	ケズリ	3/4、煤・赤色顔料付着
66	土師器 壺	口径18.2	橙色	密	良好	ナデ	ナデ	1/3
67	土師器 有段鉢	口径14.4	淡明褐色	密	良好	ナデ	ヘラミガキ	1/4
68	土師器 高杯	口径16.1	明黄褐色	密	良好	ヨコナデ・ハケ	ナデ ヘラミガキ	
69	土師器 高杯	裾径11.4	淡橙色	密	良好	ナデ・ハケ ヘラミガキ	ナデ・ハケ ヘラケズリ	1/2、円形透かし1孔残存
70	土師器 小型器台	裾径11.3	明橙褐色	密	良好	ヨコナデ ヘラミガキ	ナデ・ハケ	1/5
71	石	長辺12.4 短辺7.4	暗緑灰色	—	—	—	—	砥石?

井遺跡(大阪府)出土の1点(第23図-6)がある。

八尾市内出土銅鏃については本書第4章においてまとめているので参照されたい。

参考文献

- ・田中勝弘 1981 「弥生時代の銅鏃について」『滋賀県考古学論叢』 滋賀県考古学論叢刊行会
- ・田中勝弘 1989 「銅鏃」『季刊考古学第27号 青銅器と弥生社会』 雄山閣

第4章 まとめ

第1節 今回の調査成果について

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての5面にわたる遺構面を検出した。出土遺物量はコンテナ19箱を数え、主に弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした土器と弥生時代後期の銅鏃1点である。以下、今回の調査で検出された遺構・遺物について時代別に整理する。

《弥生時代》

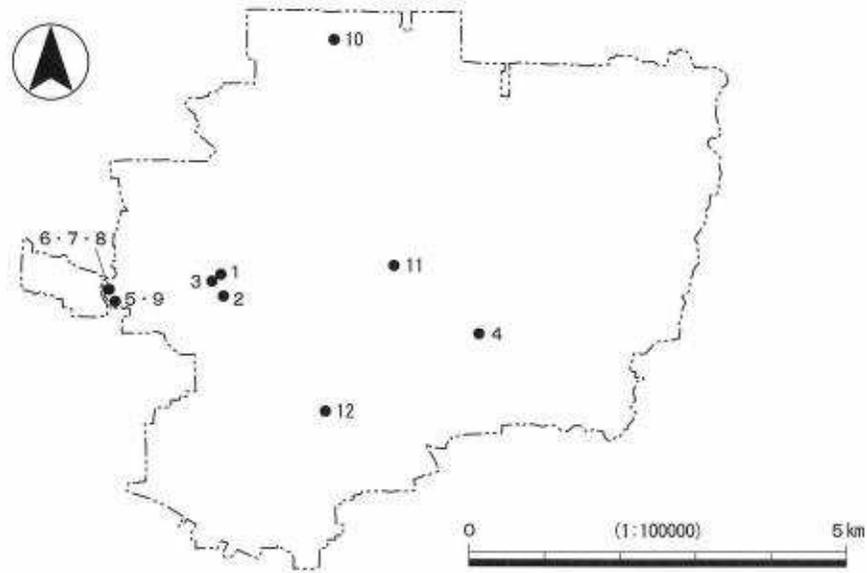
本調査地では3面の遺構を検出している。第4面～第5面では出土遺物が極小であるため時期決定が難しいが、層位的に判断して弥生時代中期～後期に比定されるとみられる。溝と落込み・河川を検出しており、調査地から南東50m地点の当調査研究会第17次調査地(第1図-T30)検出の自然河川などに対応するとみられる。これらの微地形が後の古墳時代の水田構築に少なからず影響を与えているとみられる。第3面は弥生時代後期に比定される溝を中心とする遺構群で、後代に作られる水田に関連した遺構と同じ性格をもつかは不明であるが、類似した遺構で(財)大阪府文化財調査研究センター96-1調査区(第1図-S15)第7遺構面検出の古墳時代前期に比定される溝群が土壌分析の結果、水田耕作が行われていた可能性があることを付記しておく。

《古墳時代》

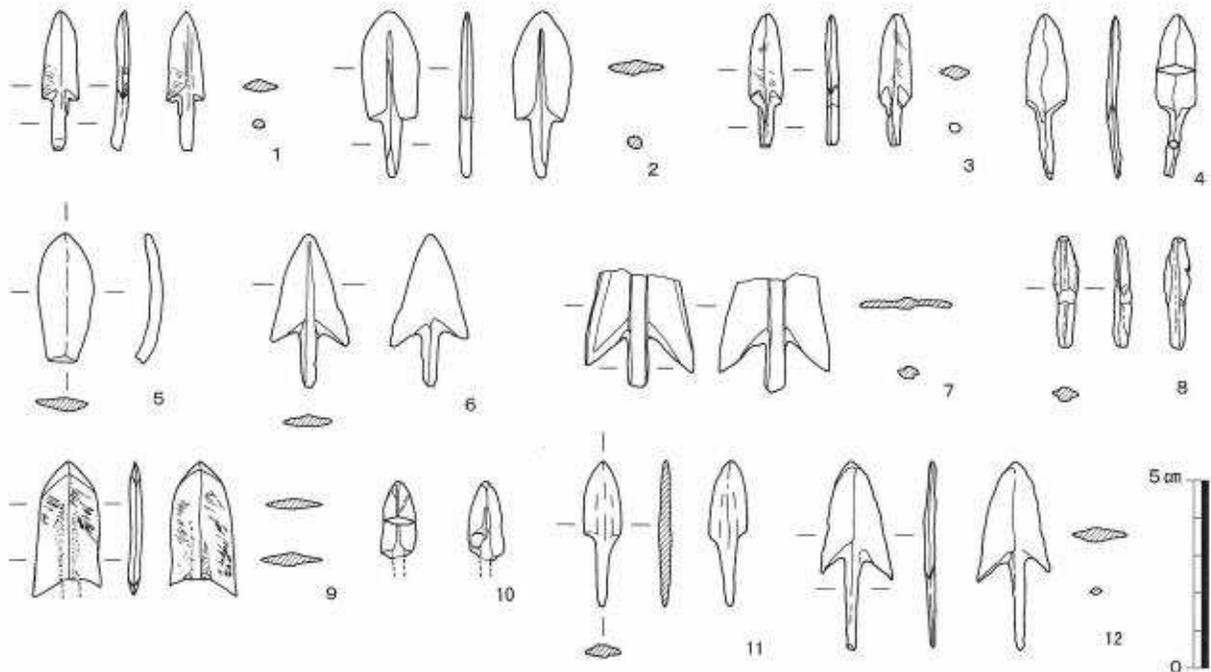
本調査地では2面の水田遺構を検出している。第1面は大畦畔を基軸に小畦畔を配して小区画水田が営まれている。第2面はある種特異な大畦畔を中心とした水田遺構である。何れの水田も大畦畔の構築位置の重なりが指摘できることから、元々の基盤地形を有効に利用したとみられる。今回検出の水田遺構は本調査地東部の志紀遺跡の発掘において確認されている古墳時代中期から後期にかけての水田遺構に対応するとみられ、水田域が更に西方に広がったことになる。

《古墳時代以降》

古墳時代以降は機械掘削の対象であったために、地層断面の観察から判断せざるを得ない。第1面の上面を覆っている第12層の洪水層を鍵層として、第1層～第11層中に2～3面の水田耕作土層と2時期の洪水層があることを指摘できる。各面の具体的な時期は不明であるが周辺の調査成果から判断すると、平安時代～室町時代(9世紀～14世紀代)の水田耕作土層と推定される。第1面検出の井戸(SE101)は室町時代中期に比定される遺物が出土しており、第7層上面で構築されていることから当該期の遺構面の存在を示すものとみられる。



第22図 八尾市内出土銅鐵分布図



第23図 八尾市内出土銅鐵実測図(1:2、各報告書図面を再トレース・一部改変)

第15表 八尾市内出土銅鐵一覧表(法量の単位はcm)

図番号	遺跡名	出土地点	時代・時期	全長	鐵身最大幅	茎長さ	茎厚さ	型式	鐵身幅指数	文献
1	跡部	銅鐸埋納城	弥生・後期	3.7	1.0	1.4	0.4	平基式	27	6
2	跡部	溝	弥生・後期	4.4	1.5	1.6	0.4	平基式	34	8
3	跡部	溝	弥生・後期	3.5	0.9	1.0	0.3	平基式	26	9
4	恩智	溝(自然河道)	弥生・一	4.4	1.2	1.9	0.3	凹基式	27	2
5	亀井	土坑	弥生・後期	3.5	1.5	—	—	凸基式	42	1
6	亀井	Ⅷb層	弥生・後期	4.2	2.2	1.5	0.3	有翼鐵	52	3
7	亀井	Ⅷb層	弥生・後期	3.1~	3.0	1.3	0.4	有翼鐵	—	3
8	亀井	OS上層	弥生・後期	2.9	0.7~	1.2	0.4	有翼鐵	—	3
9	亀井	排土内	弥生・一	3.7~	1.8	—	—	平基式	—	4
10	賞振	第7層	弥生・後期	2.1~	1.0	—	—	平基式	—	7
11	小阪合	土坑(竪穴住居?)	弥生・後期	4.0	1.0	1.9	0.4	平基式	20	5
12	田井中	第19層	弥生・後期	5.0	1.9	2.4	0.4	凹基式	38	今回報告

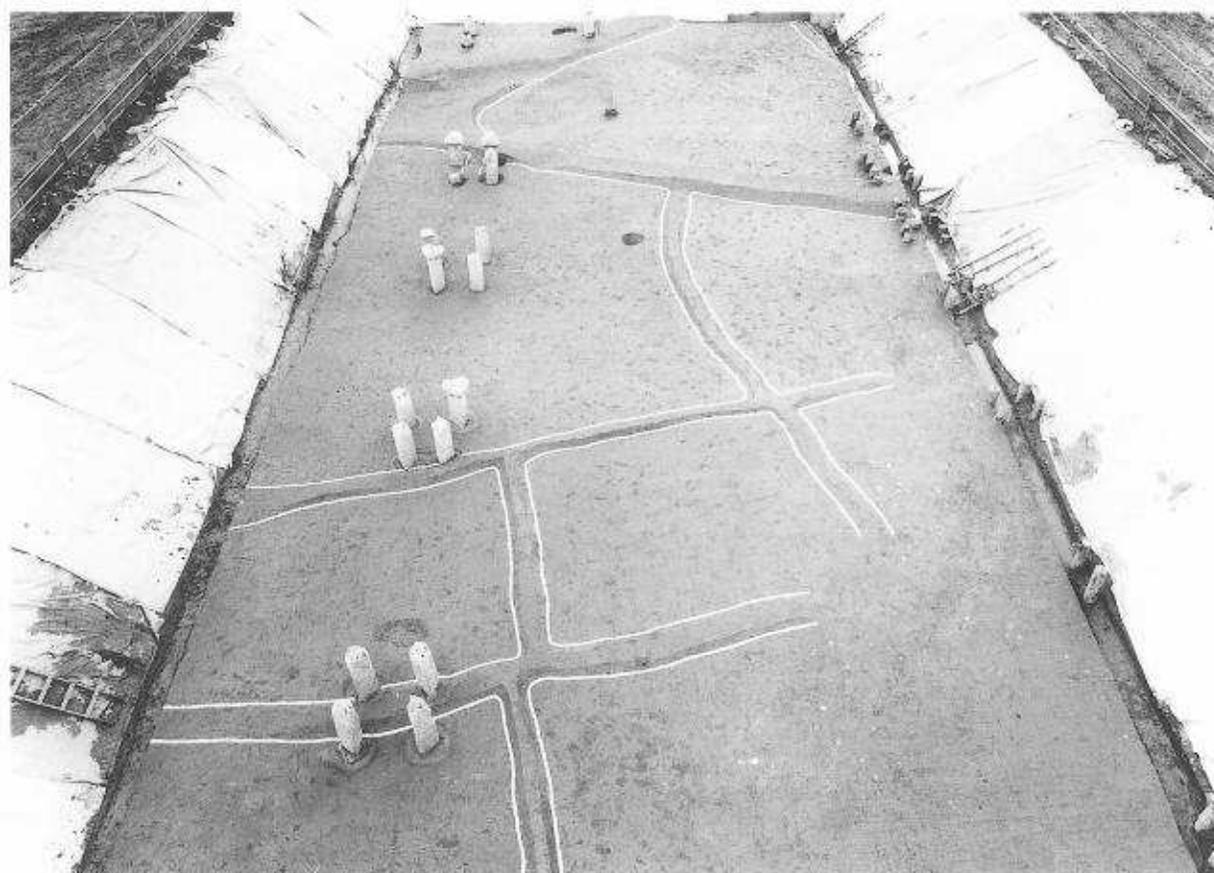
第2節 八尾市内出土銅鏃について(第22・23図、第15表)

今回の調査では3C地区の第19層中から弥生時代後期に比定される銅鏃が1点出土した。本書において、八尾市内で出土した銅鏃(対象は弥生時代に限定)について整理することにする。弥生時代の銅鏃は八尾市内の発掘調査において、現在までに合計12点が出土している(現地調査時点)。その内、遺構内出土6点・包含層出土5点・不明1点である。銅鏃はすべて有茎鏃で型式は平基式5点・凹基式2点・凸基式1点・有翼鏃3点である。八尾市内では平基式・凹基式の銅鏃が多く出土しており、近畿地方でも同じような傾向にある。また、特異な点は鏃身の鏃部分に棒状の隆起が特徴の有翼鏃の出土比率が高いことが挙げられる。銅鏃の全長は平均3.7cmを測り、今回出土した銅鏃が全長5.0cmと最も大型である。銅鏃の法量を指数化した鏃身幅指数は平均約34.2で、亀井遺跡Ⅷb層出土銅鏃(第23図-6)が52と高い数値を示している。

第15表文献

- 1 寺川史郎 1980 『亀井・城山 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪文化財センター
- 2 田代克巳他 1982 『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
- 3 高島 徹他 1982 『亀井』財団法人大阪文化財センター
- 4 宮崎泰史 1984 『亀井遺跡Ⅱ 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』財団法人大阪文化財センター
- 5 高萩千秋 1990 『(財)八尾市文化財調査研究会報告26 小阪合遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 6 安井良三・成海佳子他 1991 『(財)八尾市文化財調査研究会報告31 跡部遺跡発掘調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 7 原田昌則 1996 「Ⅲ 萱振遺跡(第13次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告52 萱振遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 8 西村公助 1997 「Ⅰ 跡部遺跡(第10次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 9 原田昌則 2004 「Ⅱ 跡部遺跡(第23次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会

圖 版

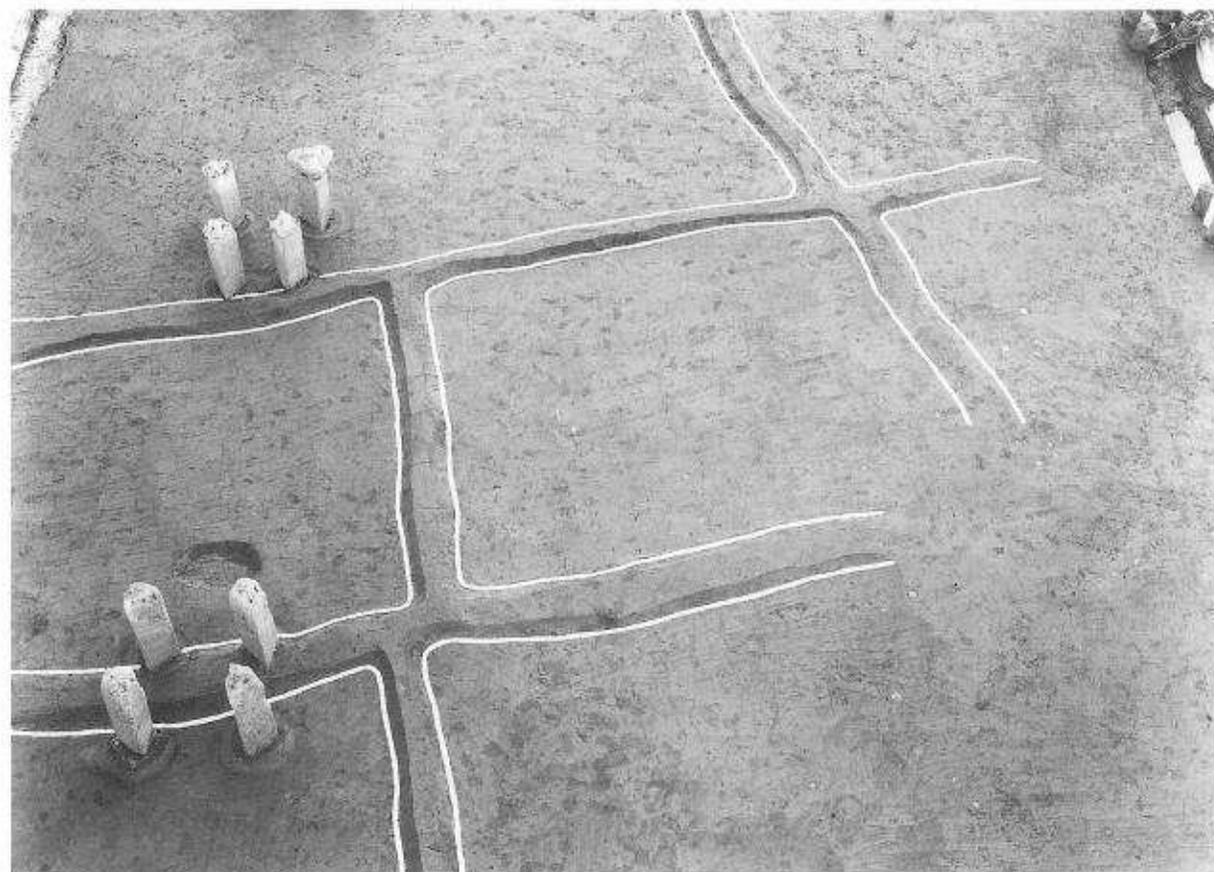


第1面全景（東から）

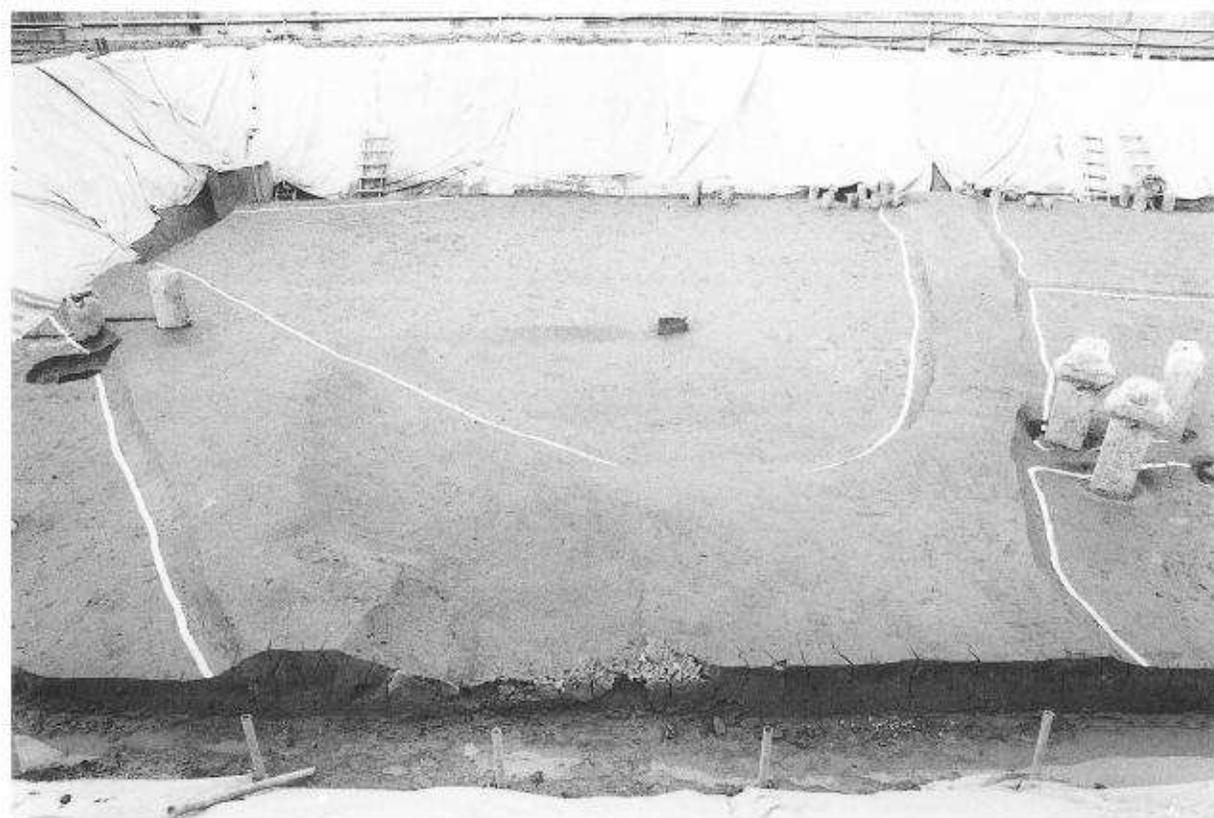


第1面全景（西から）

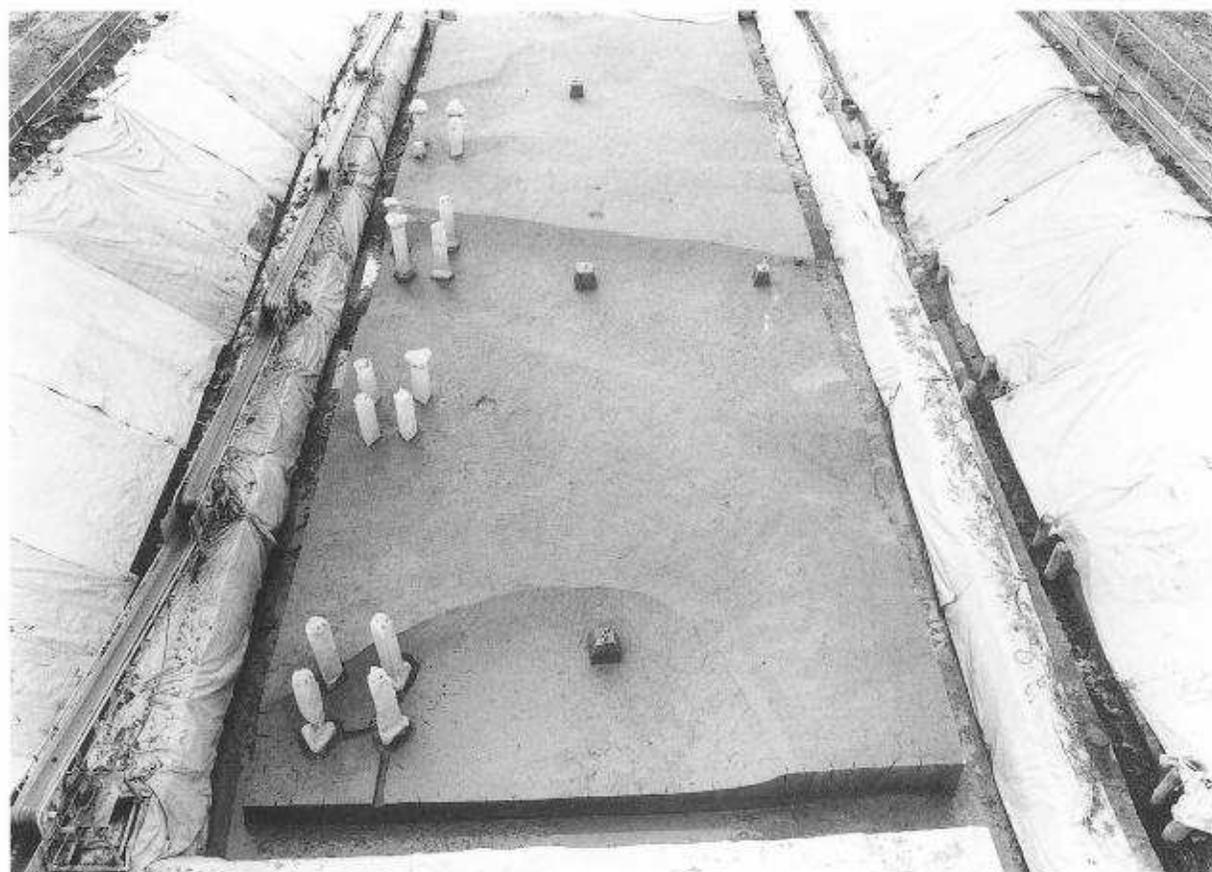
図版2



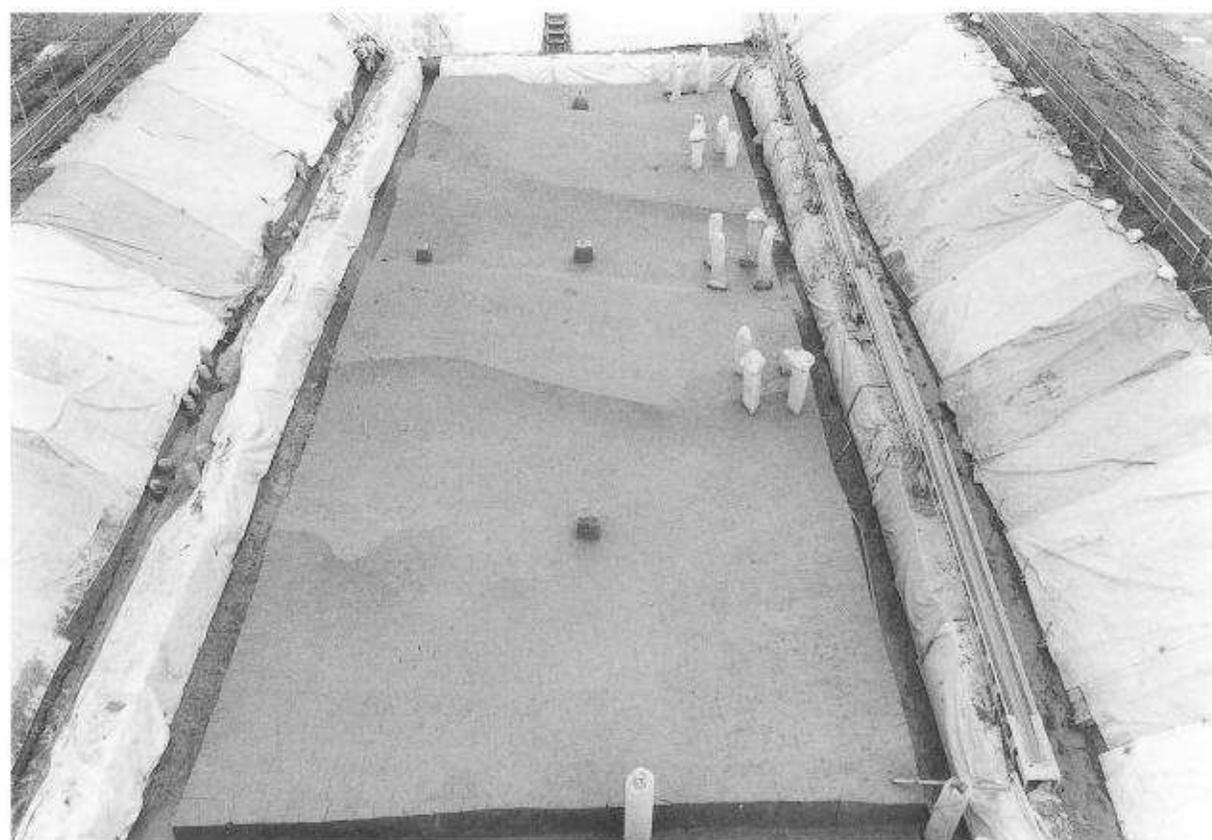
水田107 (写真中央、東から)



畦畔101・畦畔102 (南から)



第2面全景（東から）



第2面全景（西から）

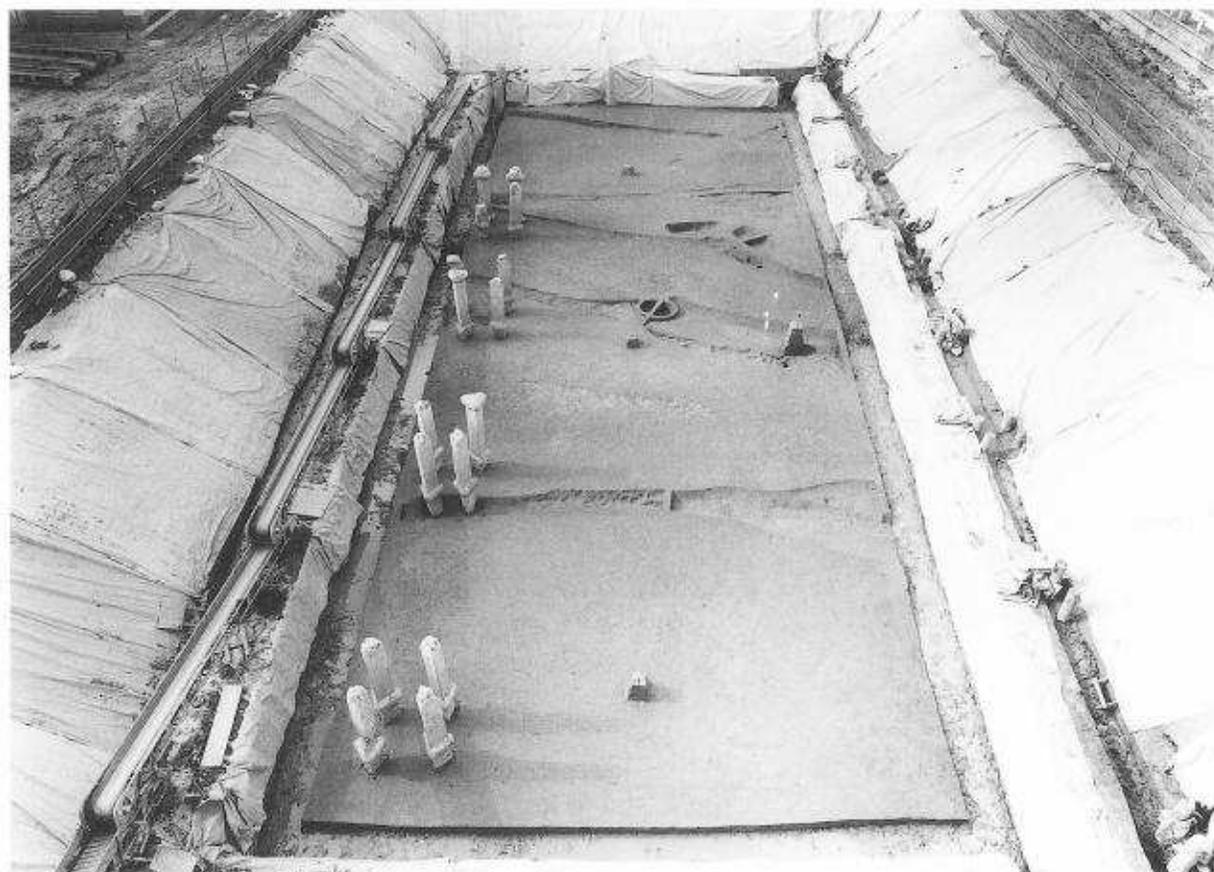
図版4



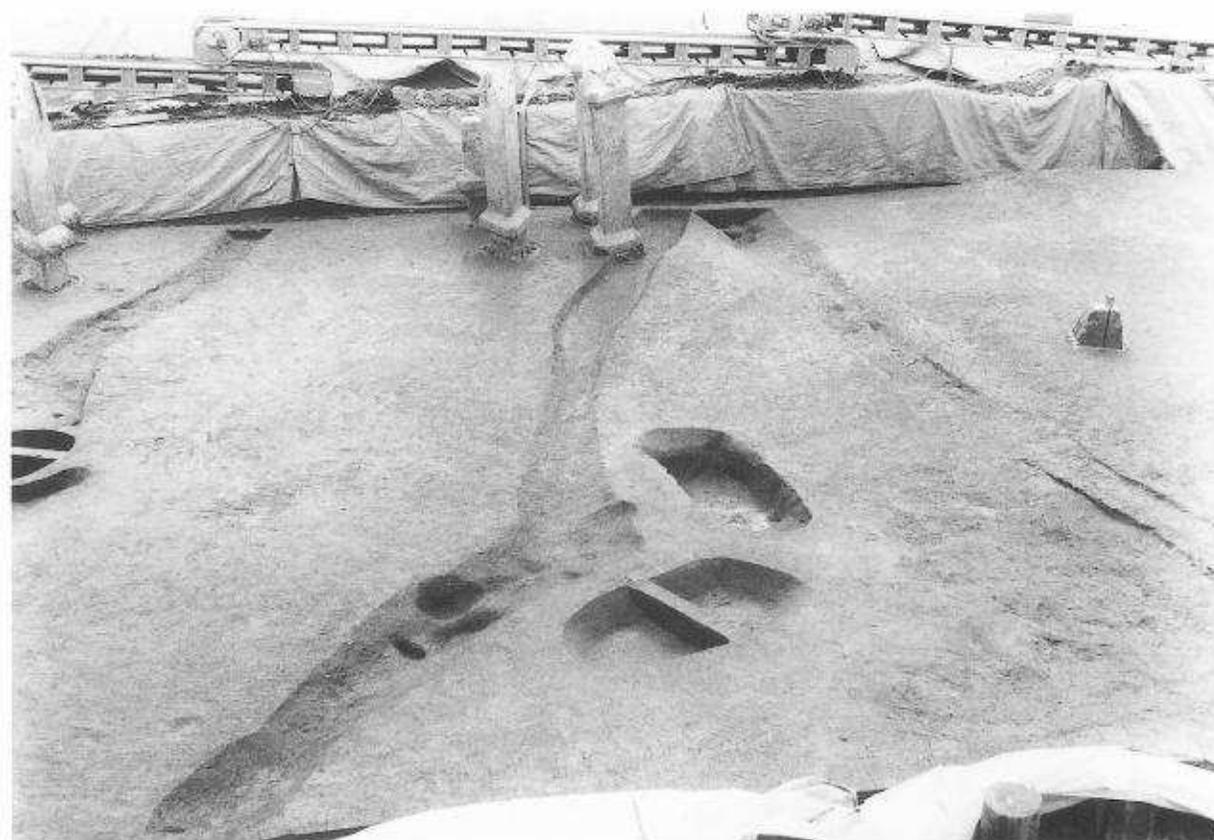
畦畔203内遺物出土状況（上が東）



畦畔205内遺物出土状況（上が東）

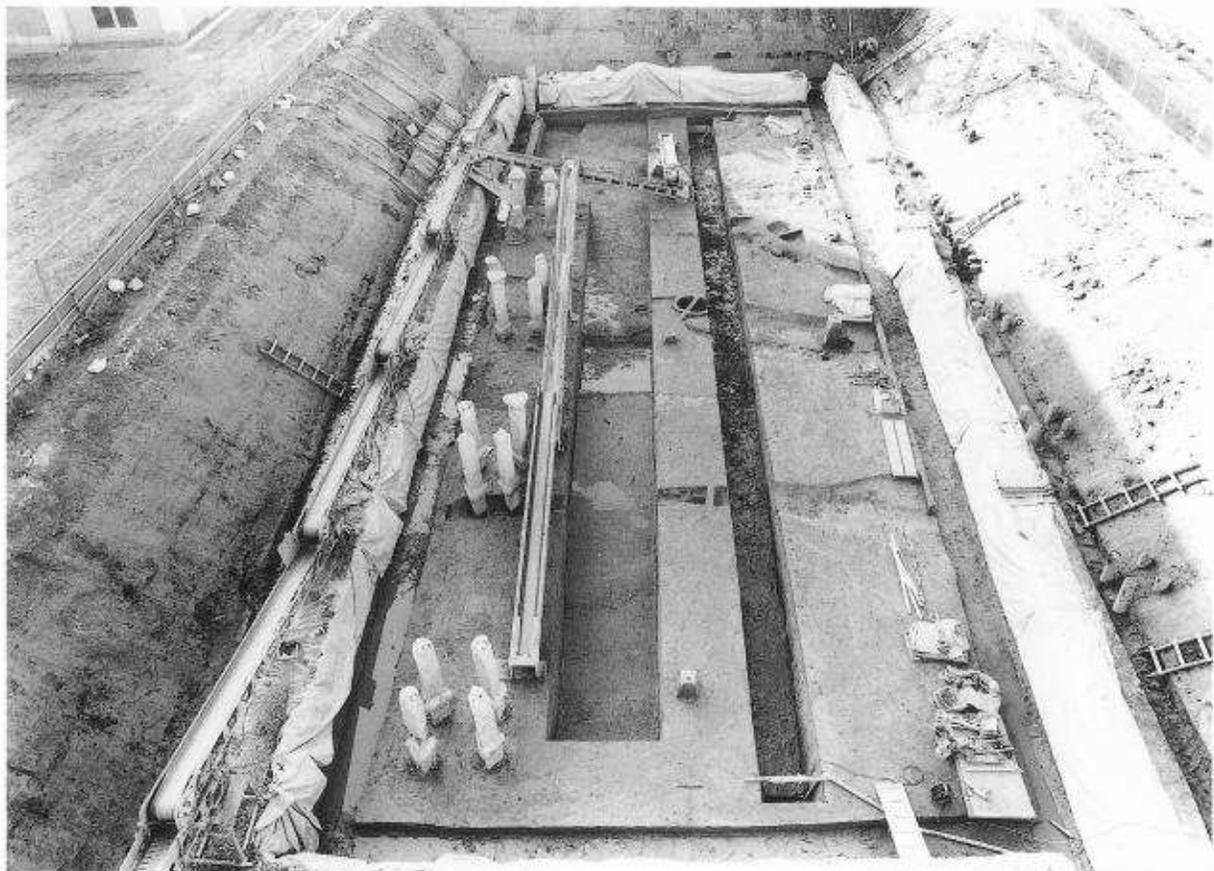


第3面全景（東から）



SK301・SK302・SD302検出状況（北から）

図版6



第4面全景（東から）



S D401検出状況（南西から）



第5面全景（西から）



S O501検出状況（南から）

图版 8



1



5



2



6



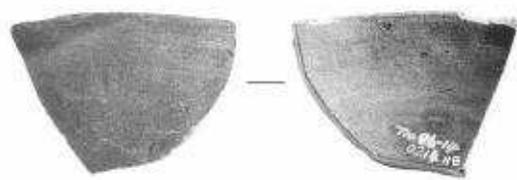
3



7



4



8



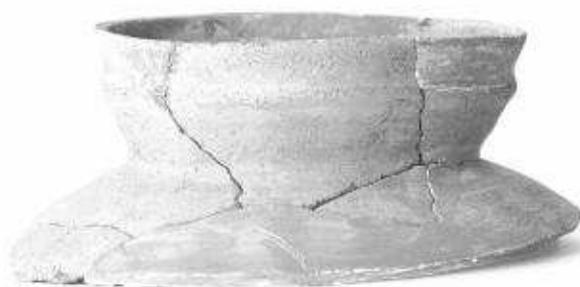
9



10



12



15



13



17



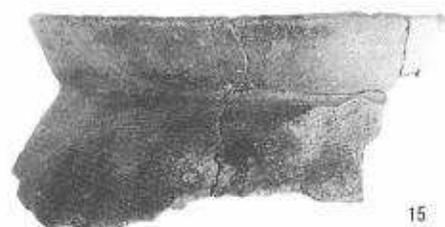
18



11



14



15

図版10



19



21



20



22



23



24



25



27



26



28



29



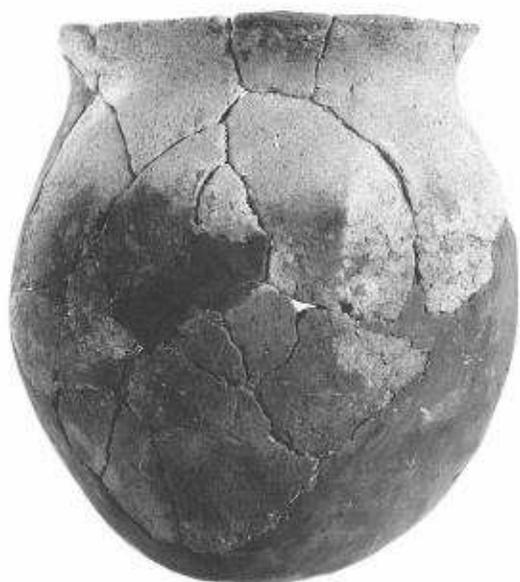
30



32



33



31



34



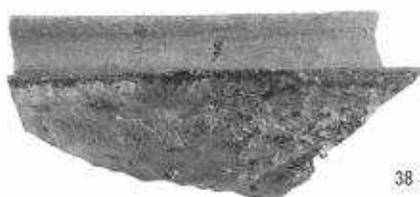
35



36



37



38



39



40



42



41



43

図版14



44



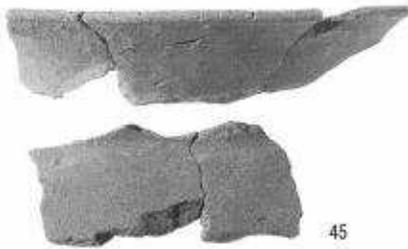
47



46



52



45



49



50



48



50



51

第15層 (44~51)・第19層 (52)出土遺物



53



56



54



57



55

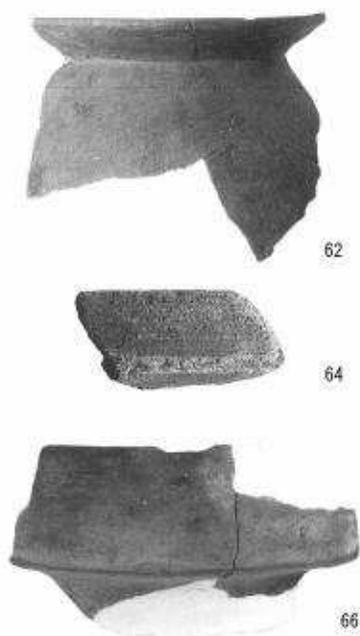


59



60

图版16



第19層出土遺物



67



68



70



69



71



72

II 田井中遺跡第17次調査 (T N98-17)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市田井中3丁目地内で実施した市立志紀小学校校舎増改築工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第17次調査(TN98-17)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年5月12日～6月16日(実働25日間)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、286㎡を測る。
1. 現地調査には市森千恵子・松本貴匡・宮崎寛子・横山妙子が参加した。
1. 内業整理は現地調査終了後随時行い、平成19年2月28日に終了した。
1. 本書の執筆は主に成海が行った。編集は荒川が行った。編集に際し、本文の一部を編集者が加除修正した。文責・加除修正した部分は目次に示した。
1. 本書作成に関わる業務の担当は、次の通りである。
遺物実測－松本貴匡・荒川和哉、遺構図面トレース－成海・荒川、遺物図面トレース－山内千恵子、図面・写真レイアウト－成海・荒川、遺物観察表作成－成海、遺物写真撮影－徳谷尚子、その他－上記現地調査参加者

本文目次

第1章 調査に至る経緯(成海・荒川).....	29
第2章 調査の概要.....	29
第1節 調査の方法と経過(成海).....	29
第2節 層序(成海・荒川).....	30
第3節 検出遺構と出土遺物.....	34
1) 検出遺構(成海・荒川).....	34
2) 出土遺物(成海).....	37
第3章 まとめ(成海).....	38

挿 図 目 次

第1図	調査区設定および地区割図	30
第2図	壁地層断面図	31・32
第3図	検出遺構平面図	35
第4図	出土遺物実測図	36

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	37
-----	---------	----

図 版 目 次

図版1	機械掘削状況 西壁上部 基本層 北壁下部 流路102西肩部分
図版2	第1面全景 第2面全景 第3面全景
図版3	出土遺物 流路102・流路102に伴う盛土・流路101・落込み101
図版4	出土遺物 落込み101

第1章 調査に至る経緯

田井中遺跡は、八尾市南部の田井中に位置しており、地理的には、南から伸びる丘陵の先端部にあたる。当遺跡は、陸上自衛隊八尾駐屯地内での下水道工事に際して発見された遺跡で、昭和57(1982)年度から、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、八文研とする)による数次の発掘調査が実施されており、縄文時代晩期から近世にわたる遺跡であることがわかっている。

特に、遺跡南部では、弥生時代前期から中期にかけての大規模な集落の存在が推定され、部分的ではあるが、集落をめぐると思われる大溝群や方形周溝墓で構成される墓域も確認されている。さらに、田井中遺跡の北東に隣接する志紀遺跡の調査においては、弥生時代から鎌倉時代にかけて連綿と水田が営まれていることが判明しており、集落の北東に生産域が広がっていたものと推定されている。今回の調査地である志紀小学校内では、平成8年度にも八文研により発掘調査(田井中遺跡第14次調査)が行われており、この調査では、古墳時代前期以降～後期の2面にわたる水田遺構とそれ以前の弥生時代後期を中心とする溝・流路などを検出したほか、弥生時代後期～古墳時代前期の土器類や銅鏃などの遺物が出土しており、これまで志紀遺跡北部で捉えられていた水田がさらに西へ広がることが明らかになった。

このような情勢の下、八尾市より八尾市田井中3丁目地内において市立志紀小学校校舎増改築工事を行う旨の届出が、市教委文化財課に提出された。申請地は田井中遺跡の周知の範囲内であり、第14次調査の成果からも埋蔵文化財の存在が予測され、工事に伴いそれが破壊されることは明らかであることから、市教委は記録保存を目的とする発掘調査が必要であると判断した。こうして、市教委・八尾市・八文研との3者で協定書が締結され、八文研が主体となり発掘調査が実施されることとなった。

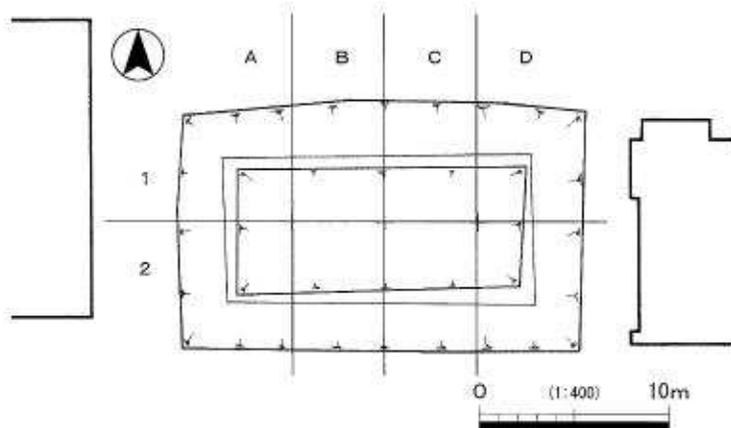
田井中遺跡の地理・歴史的環境については、本書「I 田井中遺跡第14次調査」第1章(1頁)に、田井中遺跡・志紀遺跡における既往の調査については、同第2章(5頁)にその概要を記載した。調査地の位置等については、同第1図(3頁)・第1表(2頁)を参照されたい。

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、田井中遺跡北部に位置する市立志紀小学校の校舎増改築工事に伴うもので、八文研が田井中遺跡内で実施した発掘調査の第17次調査にあたる。

調査地は、小学校南校舎の中央部を解体した部分で、東西には既存の校舎が建っており、上面の規模は、東西22m×南北13mの面積286㎡である。掘削方法は、鋼矢板等を打設しない、いわゆる「素掘り」である。当地では、これまでの調査結果から、遺構面が深く、さらに湧水の多いことが予想されていたので、安全面を考慮し、壁面の勾配を約45度に設定して機械掘削を進めた。機械掘削終了時点の面積は、東西約17m×南北約8mの136㎡である。この時点ですでに壁面からの湧水があり、壁面の崩壊が憂慮されたので、壁面の周囲に幅約1mの畦を残し、その内側に



第1図 調査区設定および地区割図

打設し、調査区全体を5m方眼で分けた。地区名は、東西方向はアルファベット(西からA～D)、南北方向は算用数字(北から1・2)で示し、1A地区から2D地区とした(第1図)。本文中の遺構検出地区・遺物出土地点の地区名はすべてこれに準じている。

調査の結果、弥生時代中期以降の流路1条(流路101)・落込み1箇所(落込み101)、弥生時代中期以降古墳時代前期(布留式期)に埋没した流路1条(流路102)、弥生時代中期の流路2条(流路101・流路201)、弥生時代中期以前の埋没河川(流路301)を検出した。出土遺物量は整理用コンテナ(60×40×20cm)1箱である。

第2節 層序(第2図、図版1)

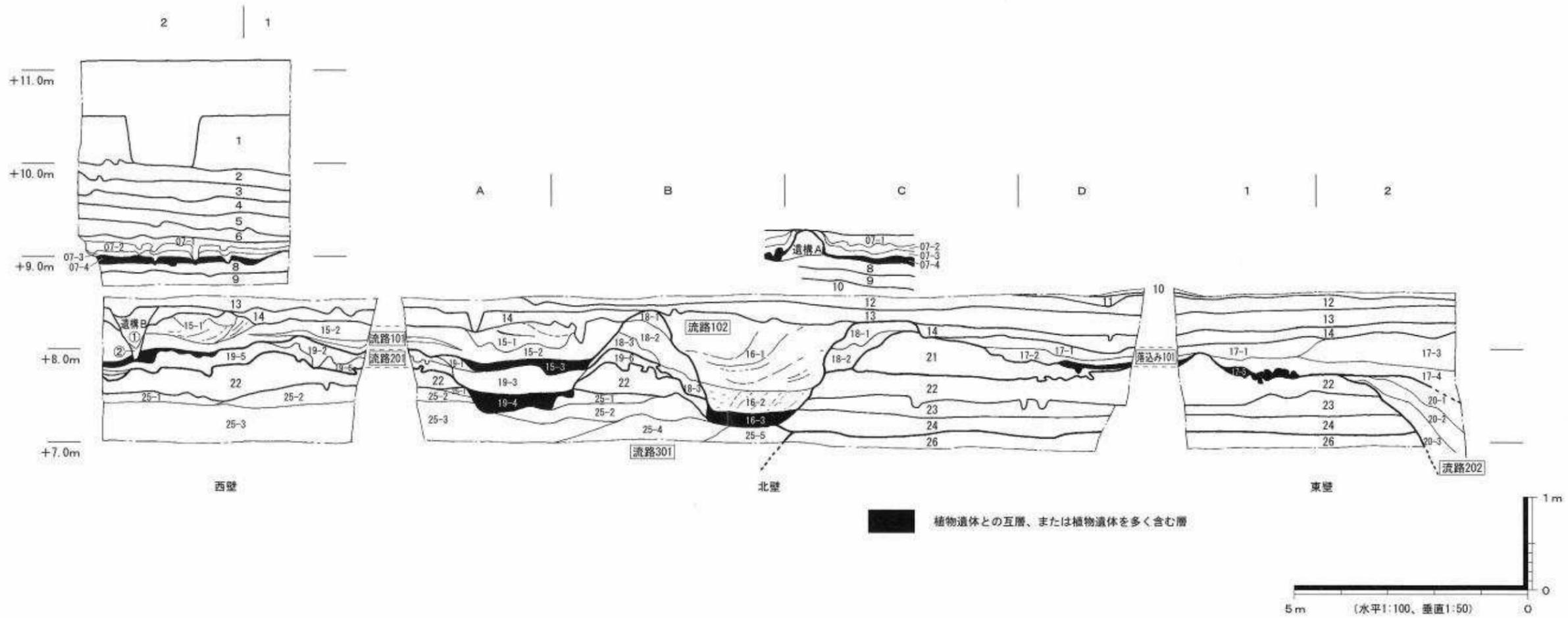
現地表面の標高はT.P.+11.0～11.2m、盛土は1m前後なされている。旧校舎の基礎杭の攪乱が深さ約1.2～1.3m程度まで及んでおり、その付近までは校舎解体の際にも攪乱されている。また、部分的に旧耕土が遺存している。

- 1層：茶灰色砂質シルト。酸化マンガン斑が顕著で、最下には酸化鉄分が沈着する。層厚0.2～0.3m。上面の標高はT.P.+10.5m前後。
- 2層：灰色砂質シルト。上面に微砂が薄く堆積する。層厚0.2～0.3m。
- 3層：青灰色微砂混じり粘質シルト。層厚0.1～0.2m。
- 4層：青灰色粘質シルト。粘性は強い。層厚0.2m前後。
- 5層：やや黄みのある灰色微砂質シルト。シルトと微砂が均一に混ざっている。層厚0.2m前後。
- 6層：赤みのある灰色砂質シルト。下部に細礫が混じる。層厚0.1～0.2m。
- 7層：粘土質シルト・微砂・粗砂などの互層。田井中遺跡北部から志紀遺跡で広範囲にみられる古墳時代後期以降の洪水層である。当調査地では4層(07-1～07-4)に分けられる。層厚0.4m前後。07-1：灰色砂質シルト・粗砂の互層、07-2：灰青色粘質シルト、07-3：灰青色微砂、07-4：植物遺体を多量に含む紫灰色粘質シルト。
- 8層：灰色粘質シルト。水田耕土の可能性のある地層である。層厚0.1～0.15m。壁断面で本層上面に盛られた畦畔(遺構A)を確認した。遺構Aの下部から古墳時代中期前半の土師器片が出土した。
- 9層：褐灰色粘質シルト。炭・植物遺体を少量含む。層厚0.15～0.2m。

幅0.5m・深さ1mの側溝を設けた後、人力掘削を行うことにした。畦内側の面積は、東西約15m前後・南北7mの約100㎡である。

掘削範囲は、第14次調査をはじめとする既往調査の結果から、機械掘削が現地表下約2.5mまで、人力掘削が1.5～1.7mである。

調査区の地区割については、調査区のほぼ中央に任意の杭を打設し、これを基点に東西各5m地点に杭を



- 1層 茶灰色砂質シルト
- 2層 灰色砂質シルト
- 3層 青灰色微砂混じり粘質シルト
- 4層 青灰色粘質シルト
- 5層 やや黄みのある灰色微砂質シルト
- 6層 赤みのある灰色砂質シルト(下部に細礫含む)
- 7層
 - 07-1 灰色砂質シルトと粗砂の互層
 - 07-2 灰青色粘質シルト
 - 07-3 灰青色微砂
 - 07-4 紫灰色粘質シルト(植物遺体多量に含む)
- 8層 灰色粘質シルト
- 9層 褐灰色粘質シルト(炭・植物遺体を少量含む)
- 10層 淡青灰色粘質シルト(礫を少量含む)
- 11層 灰色微砂
- 12層 灰色粘質シルト
- 13層 暗灰色礫混じり粘土
- 14層 青灰色砂質シルト(暗灰色粘土のブロック混在)
- 15層
 - 15-1 灰色シルト・粗砂・礫の互層
 - 15-2 青灰色微砂主体褐灰色粘質シルトの互層
 - 15-3 青灰色微砂と植物遺体の互層

洪水層

水田耕土

流路101埋土

- 16層
 - 16-1 粗砂～礫・灰色シルトの互層に灰褐色粘土のブロック
 - 16-2 粗砂・礫・青灰色シルトと微砂の互層
 - 16-3 灰色シルトと植物遺体の互層
- 17層
 - 17-1 粗砂に青灰色粘土・褐色粘土のブロック
 - 17-2 微砂に青灰色粘質シルトのブロック
 - 17-3 粗砂・礫・青灰色微砂の互層
 - 17-4 植物遺体・淡褐色粘土・青灰色微砂の互層
 - 17-5 植物遺体
- 18層
 - 18-1 暗灰色粘土・礫のブロック
 - 18-2 青灰色微砂・灰色シルト・褐色粘土のブロック
 - 18-3 青灰色シルト・褐色粘土のブロック
- 19層
 - 19-1 粗砂に褐色粘土のブロック層
 - 19-2 褐色粘土と青灰色シルトの互層またはブロック層
 - 19-3 粗砂
 - 19-4 褐色粘質シルトと微砂の互層
 - 19-5 粗砂・暗褐色粘土・灰色シルト・植物遺体の互層
 - 19-6 褐色礫混じり粘土

流路102埋土

落込み101埋土

流路102に伴う盛土層

流路201埋土

- 20層
 - 20-1 微砂と淡褐色粘土の互層
 - 20-2 粗砂・淡褐色粘土・植物遺体の互層
 - 20-3 粗砂～礫
- 21層 礫
- 22層 褐色粘土
- 23層 青灰色シルト
- 24層 青灰色微砂
- 25層
 - 25-1 礫混じり褐色粘土
 - 25-2 灰褐色粘土・青灰色シルト・粗砂・礫の互層
 - 25-3 粗砂～礫
 - 25-4 青灰色礫混じりシルト
 - 25-5 灰色微砂・褐色粘土・植物遺体の互層
- 26層 灰色微砂

流路202埋土

流路301埋土

【平面未検出の遺構埋土】

- 遺構A 灰色粘土
- 遺構B ①シルト
- ②礫

第2図 壁地層断面図

- 10層：淡青灰色粘質シルト。礫を少量含む。層厚0.1m前後。
- 11層：灰色微砂。層厚0.1m未満。本層以下第14層までが、南東側で厚く、北西側で薄くなる。
- 12層：灰色粘質シルト。層厚0.1～0.3m。
- 13層：暗灰色礫混じり粘土。東部で粘性が強くなる。層厚0.1～0.3m。
- 14層：青灰色砂質シルト。暗灰色粘土がブロック状に混じる。南東部の落込み101上部では、砂粒が粗くなる。層厚0.1～0.2m。
- 15層：砂礫～粘質シルト・植物遺体の互層。流路101埋土。3層(15-1～15-3)に分けられる。
15-1：灰色シルト・粗砂・礫の互層、15-2：青灰色微砂主体(褐灰色粘質シルトの薄層を挟む)、15-3：青灰色微砂・植物遺体の互層。
- 16層：粘土のブロックを含む砂礫・微砂・シルト・植物遺体の互層。斜交層理・葉理が見られる。流路102埋土。3層(16-1～16-3)に分けられる。層厚は0.2～0.4m以上。上面の標高は7.8～8.3m。16-1：粗砂～礫・灰色シルトの互層に灰褐色粘土のブロック、16-2：粗砂・礫・青灰色シルトと微砂の互層、16-3：灰色シルト・植物遺体の互層。
- 17層：粘質シルト・粘土ブロックを含む砂、砂礫・微砂・粘土・植物遺体の互層。落込み101埋土。5層(17-1～17-5)に分けられる。本層までを除去した面が第1面。17-1：粗砂に青灰色粘土・褐色粘土のブロック、17-2：微砂に青灰色粘質シルトのブロック、17-3：粗砂・礫・青灰色微砂の互層、17-4：植物遺体・淡褐色粘土・青灰色微砂の互層、17-5：植物遺体。
- 18層：礫・微砂・シルト・粘土のブロック。流路102に伴う堤状の盛土。3層(18-1～18-3)に分けられる。18-1：暗灰色粘土・礫のブロック、18-2：青灰色微砂・灰色シルト・褐色粘土のブロック、18-3：青灰色シルト・褐灰色粘土のブロック。
- 19層：粘土のブロックを含む粗砂、粗砂・微砂・シルト・粘質シルト・粘土・植物遺体の互層。流路201埋土。6層(19-1～19-6)に分けられる。19-1：粗砂に褐色粘土のブロック、19-2：褐色粘土・青灰色シルトの互層またはブロック層、19-3：粗砂、19-4：褐色粘質シルトと微砂の互層、19-5：粗砂・暗褐色粘土・灰色シルト・植物遺体の互層、19-6：褐色礫混じり粘土。
- 20層：粗砂・微砂・粘土の互層、砂礫。流路202埋土。3層(20-1～20-3)に分けられる。20-1：微砂・淡褐色粘土の互層、20-2：粗砂・淡褐色粘土・植物遺体の互層、20-3：粗砂～礫。
- 21層：礫。本層までを除去した面が第2面。
- 22層：褐色粘土。層厚は0.1～0.6m。上面の標高は7.7～8.0m。
- 23層：青灰色シルト。層厚0.15m前後。
- 24層：青灰色微砂。層厚0.2～0.3m。
- 25層：砂礫、微砂・シルト・粘土・植物遺体の互層。流路301埋土。確認部分で5層(25-1～25-5)に分けられる。本層までを除去した面が第3面。25-1：褐色礫混じり粘土、25-2：灰褐色粘土・青灰色シルト・粗砂・礫の互層、25-3：礫～粗砂、25-4：青灰色礫混じりシルト、25-5：灰色微砂・褐色粘土・植物遺体の互層。
- 26層：灰色微砂。洪水層あるいは河川の堆積層。層厚0.2～0.3m以上。上面の標高は7.0m未満。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構

・第1面(第3図、図版2)

17層までを除去した面(T.P.+7.6~8.4m)で、弥生時代中期以降古墳時代前期(布留式期)に埋没した流路1条(河川102)・弥生時代中期以降の流路1条(河川101)・落込み1箇所(落込み101)を検出した。

流路101

調査区西部の1~2A・B地区で検出した。南北方向に、僅かに東へ振る形で伸びる。調査区北西端で西側の岸を僅かに検出した。幅3.5m以上、深さ約0.6mを測る。埋土については、第2図に示したように、砂礫~粘質シルト・植物遺体の互層である。出土遺物は、15-2層の下部から弥生土器片が少量出土している。

流路102(図版1)

調査区中央部の1~2B・C地区で検出した。南北方向に、僅かに東へ振る形で伸びる。幅4.0~4.8m、深さ0.9~1.2mを測る。埋土については、第2図に示したように、粘土の偽礫を含む砂礫・微砂・シルトの互層で、斜交層理・葉理が見られる。出土遺物は、各層から弥生土器片が出土しているが、最上層の15-1層からは布留式甕の口縁部片などが数点出土している。

両岸には堤状の高まりが形成されている。流路101・落込み101の底からは0.4~0.5mほどの高さがある。堤状の高まりは、礫・微砂・シルト・粘土のブロックからなる盛土である。盛土内の出土遺物は、18-2層から弥生土器片が出土している。

落込み101

調査区東部の1~2C・D地区で検出した。流路102東岸の堤状の高まりから東側に緩やかに落ち込み、底面は部分的な起伏はあるものの平坦である。深さ0.2~0.3mを測る。埋土については、第2図に示したように、粘質シルト・粘土のブロックを含む砂からなる上層と、微砂・粘土・植物遺体の互層からなる下層に大きく分けられる。17-1層上面には炭や僅かな汚れがあることから、遺構面が削平されている可能性がある。出土遺物は、各層から弥生土器が出土しているが、17-1層上面、岸を形成する21層直上、17-5層からは比較的纏まって出土している。

・第2面(第3図、図版2)

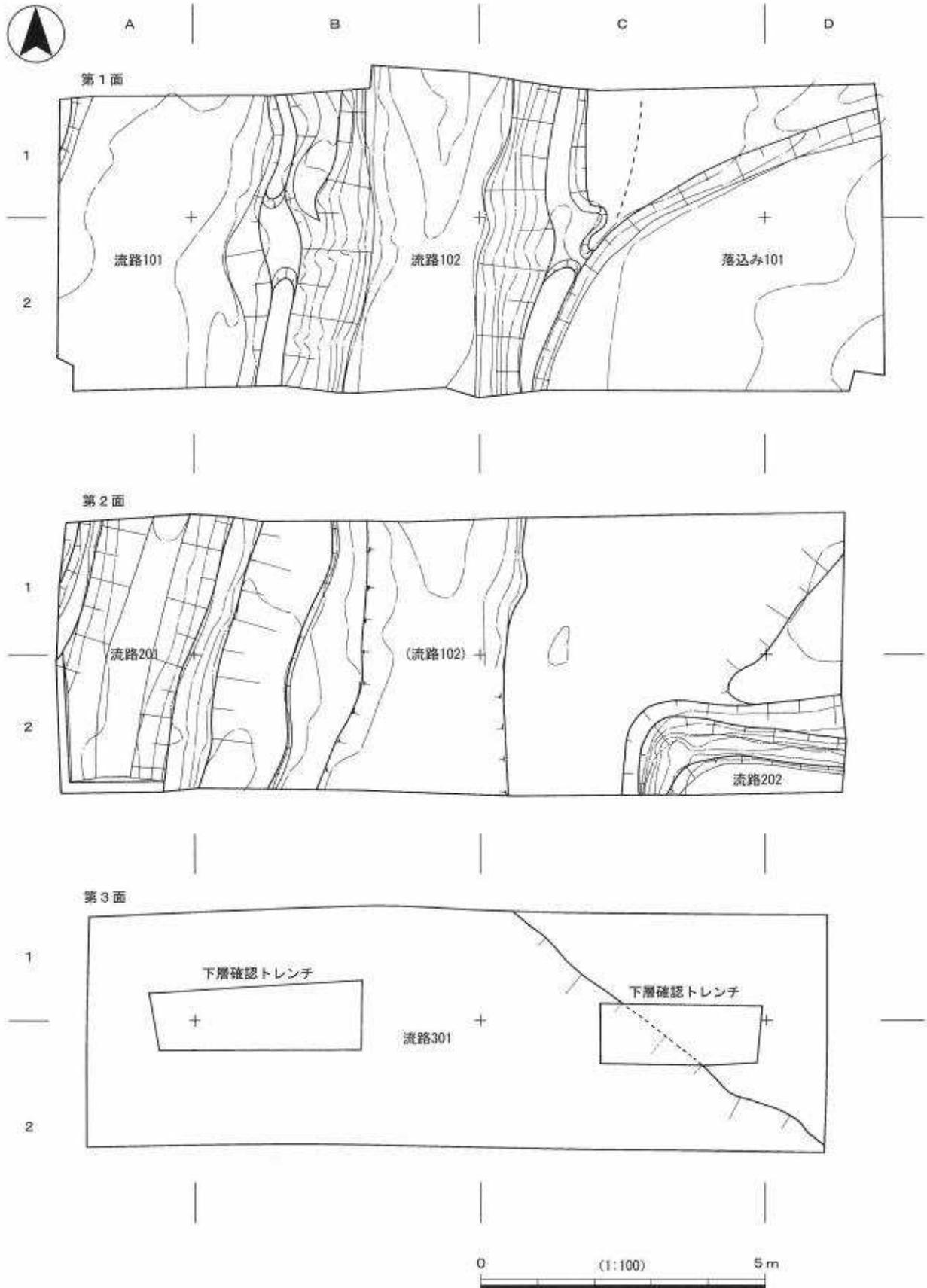
第20層までを除去した面(T.P.+7.8~8.0m)で、弥生時代中期の埋没流路2条(流路201・流路202)を検出した。

流路201

調査区西部の1~2A・B地区、流路101のほぼ真下で検出した。南北方向に、僅かに東へ振る形で伸びる。調査区北西端で西側の岸を僅かに検出した。幅2.6~3.0m、深さ約0.6mを測る。埋土については、第2図に示したように、流路の岸に沿う形で見られる19-6層以外は粗砂・微砂・シルト・粘質シルト・粘土の互層を主体とする。19-6層については、流路に伴う盛土である可能性が高い。埋土からの出土遺物はない。

流路202

調査区南東部の2C・D地区で検出した。南側・東側が検出部分の外に至るため、南から東へ



第3図 検出遺構平面図

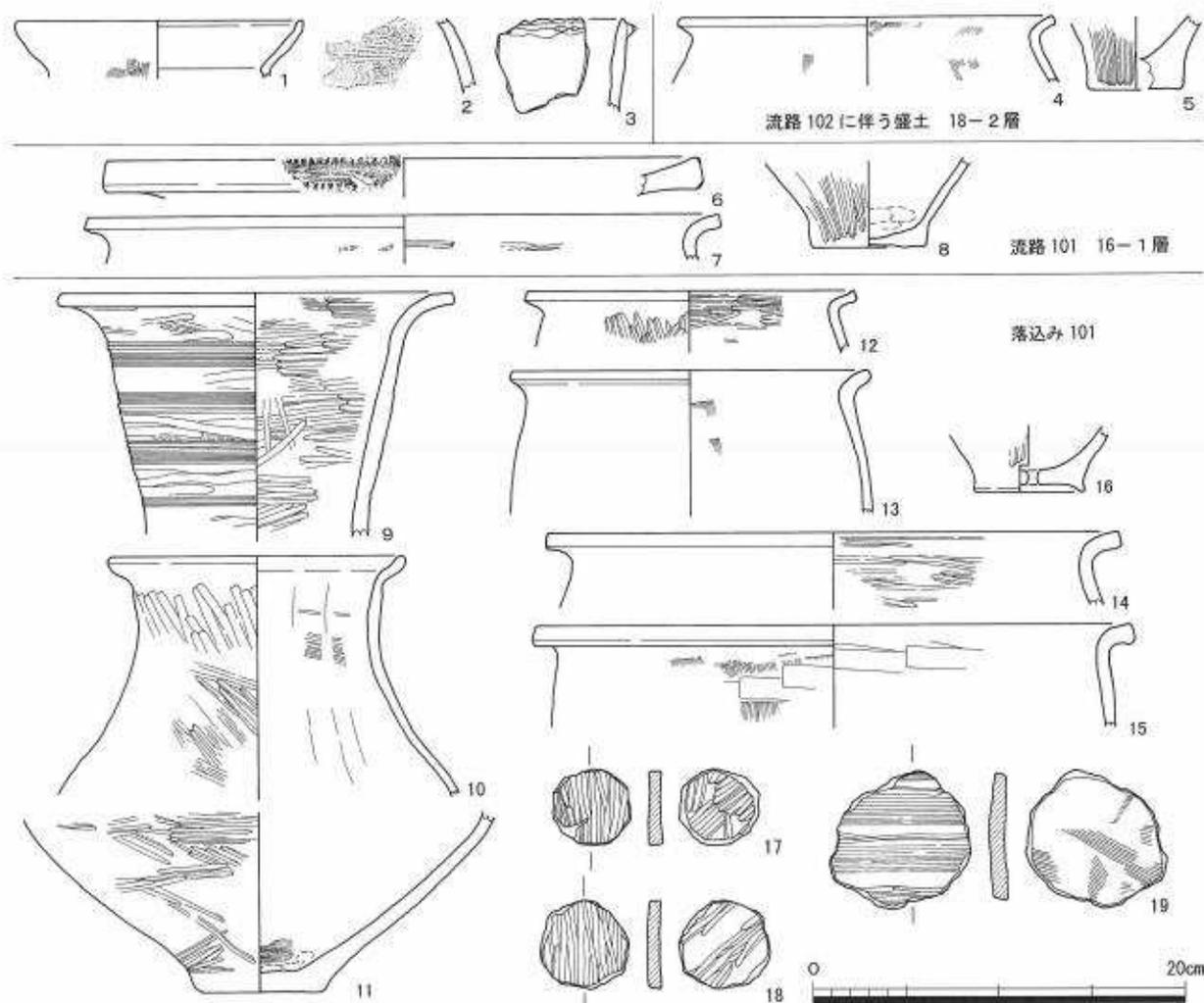
屈曲する部分の肩のみを検出した。落込み101の底面から1.0m以上の深さで急激に落ち込む。埋土については、第2図に示したように、砂・粘土・植物遺体の互層からなる上層と、砂礫からなる下層に大きく分けられる。埋土からの出土遺物はない。

・第3面(第3図、図版2)

26層上面(T.P.+7.1m前後)で、弥生時代中期以前の埋没河川1条(流路301)を検出した。

流路301

調査区北東部を除くほぼ全域で検出した。調査区南東隅から北部中央に向かって、南東-北西方向に伸びる流路の肩が確認できた。ベースとなるのは最下で確認した第26層灰色微砂で、上面の標高は7.1m前後、現地表下4.0mに達する。流路内には、第2図に示したように、砂礫、礫混じり粘土、礫・砂・シルト・粘土・植物遺体の互層が堆積している。深さは0.7m程度までを確認したが、25-3層からの湧水が激しく、それ以下は掘削できなかった。検出時での幅は約9mを測るが、流路中心部の堆積土層である25-3層が調査区南側で全体的にみられることから、かなりの幅をもつものと考えられる。



第4図 出土遺物実測図

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	出土地	器種	計測値	調整・施文等	備考
1	流路102 15-1層	布留式甕	口径15.5	横ナデ、外面：頸部にハケ目残る	
2	流路102 15-1層	弥生土器 壺	-	半截竹管による流水文・直線文	体部の破片
3	流路102 15-1層	縄文土器 鉢	-	口縁端部・貼り付け突帯上にヘラによる刻み目	
4	流路102に伴う盛土 18-2層	弥生土器 甕	口径19.8	口縁部横ナデ、外面：ナデ、口縁部面・体部にハケ目残る	
5	流路102に伴う盛土 18-2層	弥生土器 甕	底径4.8	外面：縦ヘラミガキ、底面ナデ	内面：剥離
6	流路101 16-1層	弥生土器 壺	口径33.5	横ナデ、口縁部外端面に櫛描き直線文、上下端にヘラによる刻み目	
7	流路101 16-1層	弥生土器 甕	口径35.9	口縁部横ナデ、内面：肩部に横ヘラミガキ、外面：ハケ目残る	
8	流路101 16-1層	弥生土器 甕	底径6.0	外面：縦ヘラミガキ、底面ナデ、内面：指押さえナデ	
9	落込み101 17-2層	弥生土器 壺	口径21.0	口縁部横ナデ、外面：頸部に櫛描き直線文4帯、直線文の間に横ヘラミガキ、内面：横ヘラミガキ	
10	落込み101 22層直上	弥生土器 壺	口径15.7	外面：頸部にナデ、ナデ後体部にヘラミガキ、内面：絞り目、ハケ目残る	
11	落込み101 17-1層	弥生土器 壺	底径6.5	外面：ヘラミガキ、内面指押さえ、ハケ	
12	落込み101 17-1層	弥生土器 甕	口径17.3	口縁部横ナデ、外面：肩部縦ヘラミガキ、内面：肩部横ヘラミガキ	
13	落込み101 17-1層	弥生土器 甕	口径19.0	口縁部横ナデ、内面：ハケ目残る	
14	落込み101 17-1層	弥生土器 甕	口径30.0	口縁部横ナデ、内面：肩部にヘラミガキ	
15	落込み101 22層直上	弥生土器 甕	口径32.0	口縁部ヨコナデ、外面縦後ナデ、内面ナデ	
16	落込み101 22層直上	弥生土器 甕	底径5.8	外面：縦ヘラミガキ、焼成後穿孔(径0.5~0.7cm)	内面：剥離
17	落込み101 17-1層	土製円板	径4.2 厚さ0.7	内外面共にヘラミガキ、周縁は一部研磨	壺体部片を加工
18	落込み101 22層直上	土製円板	径4.9 厚さ0.7	外面：ヘラミガキ、内面：ナデ後一部ヘラミガキ、周縁は一部研磨	壺体部片を加工
19	落込み101 22層直上	土製円板	径7.5 厚さ0.9	外面：櫛描き直線文間にヘラミガキ、内面：ハケ、周縁は粗く研磨	壺体部片を加工

2) 出土遺物(第4図、第1表、図版3・4)

遺物の出土量は整理用コンテナ1箱と多くはない。

壁面で確認した古墳時代の水田畦畔(遺構A)の下部からは、古墳時代中期前半の土師器片が出土している。

第12層からは、いわゆる「庄内甕」または「布留式甕」にあたる「薄手内面ヘラケズリ」の体部片がごく少量出土している。また、流路102の15-1層からも「布留式甕」の口縁部などが出土している。また、落込み101の上位層である東部の第13層・第14層、および落込み101の肩を形成する第22層直上、17-1層上面、17-5層中などから弥生時代中期前半の土器類が比較的多く出土している。弥生時代中期の土器は、その他に流路102上位の11層中・流路102に伴う堤状の盛土内の18-2層中・流路101の16-1層中からも少量出土している。

第3節 まとめ

田井中遺跡・志紀遺跡ではこれまでに縄文時代晩期にまで溯る遺構・遺物の検出が報ぜられている。とくに当調査地を含む北部では、大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会・(財)大阪府文化財調査研究センターによる深層部にまでおよぶ大規模な発掘調査によって、洪水に埋まった水田遺構が重層的に検出されている。

今回の調査では、前回調査(TN96-14)の結果を参考に機械掘削範囲を2.5m・人力掘削範囲が1.0mに設定された。そのため、現地表下2.0m前後にあった古墳時代中期以降の洪水層(7層)・耕土の可能性のある土層(8層)はやむなく重機によって掘削してしまったが、そこより約0.5m下の粗砂層(流路101)をそれ以前の洪水層と考え、古墳時代中期以前を調査対象とすることにして調査を進めた。

調査の結果、当調査地では、8層上面で畦畔を確認した以外は、第10層・第12層が水田耕土の可能性のあるものの、確証は得られず、複数時期の水田が数枚重なっているという状況は認められなかった。

8層の水田は、第14次調査地の地層との対照や畦畔(遺構A)の下から出土した土師器片によって、古墳時代中期前半のものに比定できる。12層は層中の土器片から、古墳時代前期以降に堆積したものであろう。

平面的に検出した4条の流路・河川は、出土遺物や切りあいから、流路201・流路202→流路101→流路102の順に形成されたことがわかる。まず、弥生時代中期を境として、それ以前の流路202は急流であったが、その後徐々にゆるやかな流れとなって沼沢地(落込み101)となる。この頃、流路201も同様に流れは一時停滞するが、再び、同様の流路(流路101)をもつ。流路102はこの頃に形成されたもので、流路101と流路102は並存していたものと考えられる。

流路301は弥生時代中期以前に流れていた、当地周辺の基盤となるものであろうが、既往調査で確認されているものでは、当調査地から南南東約120mの志紀遺跡の調査地で確認されている縄文時代晩期の洪水層(西川1995)に対応する可能性がある。

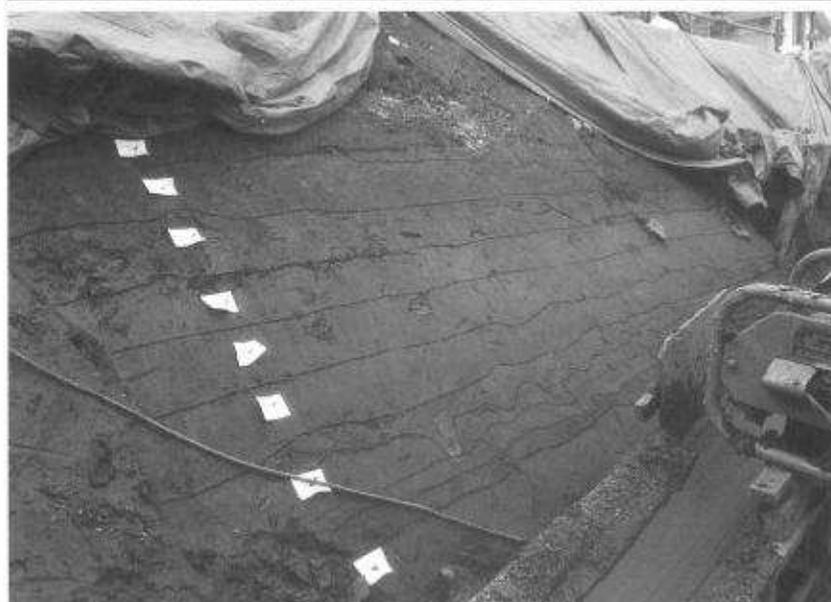
参考文献

西川寿勝 1995 『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第91輯 志紀遺跡 大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書』

圖 版



機械掘削状況(北西から)



西壁上部 基本層(北西から)



北壁下部 流路102西肩部分(北から)

図版2



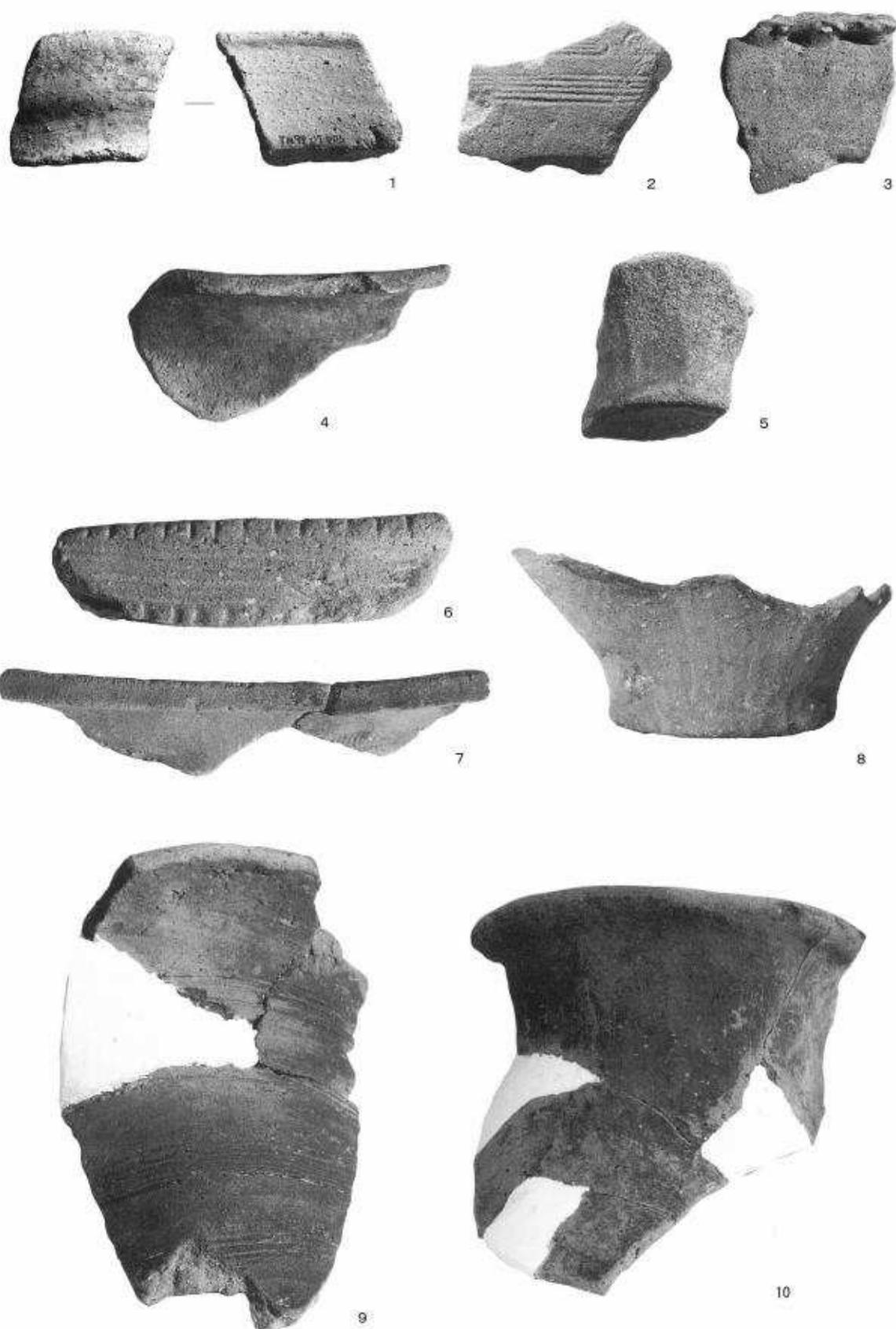
第1面(西から)



第2面(右が東)

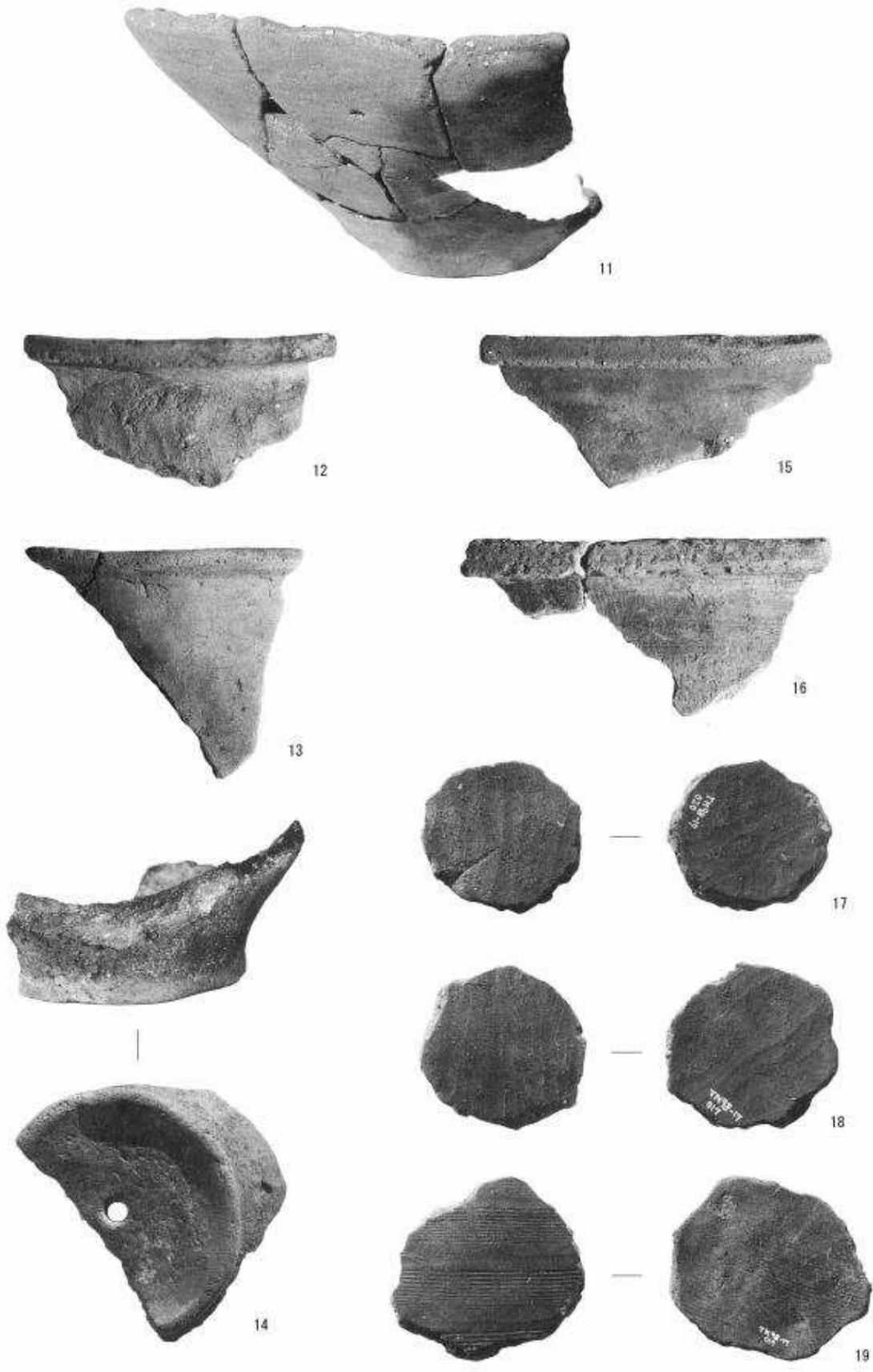


第3面(北西から)



出土遺物 流路102 (15-1層) : 1~3、流路102に伴う盛土 (18-2層) : 4・5
流路101 (16-1層) : 6~8、落込み101 : 9・10

図版4



出土遺物 落込み101 : 11~19

報告書抄録

ふりがな	たいなかいせき ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく100
書名	田井中遺跡 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告100
副書名	I 田井中遺跡(第14次調査) II 田井中遺跡(第17次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	100
編著者名	I 成海 佳子・古川 晴久・荒川 和哉、II 成海 佳子・荒川 和哉
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田井中遺跡 (第14次調査)	大阪府八尾市田井中3丁目	27212	69	34度 35分 58秒	135度 36分 20秒	19961022 ～ 19961227	約600㎡	八尾市立志紀小学校 講堂兼屋内運動場建設
田井中遺跡 (第17次調査)	大阪府八尾市田井中3丁目	27212	69	34度 35分 56秒	135度 36分 32秒	19980512 ～ 19980616	286㎡	八尾市立志紀小学校 校舎増改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田井中遺跡 (第14次調査)	集落	弥生時代中期	落込み1箇所 自然河川1条	弥生土器	
		弥生時代後期	溝1条 落込み1箇所	弥生土器	地層内から銅鏃1点出土
		弥生時代後期	土坑3基 溝5条	弥生土器	
	生産	古墳時代中期以降	水田3筆 畦畔5条	土師器・須恵器	志紀遺跡から続く水田が更に西方に拡がる
		古墳時代後期	水田10筆 畦畔7条	土師器・須恵器	
	集落	室町時代前期	井戸1基	土師器・瓦・横櫓	
田井中遺跡 (第17次調査)	集落	弥生時代中期以前	河川1条		
		弥生時代中期	流路1条 落込み1箇所	弥生土器	
		弥生時代中期以降	流路2条	弥生土器	
		古墳時代前期	河川1条	古式土師器	
	生産	古墳時代中期前半		土師器	壁断面で畦畔を確認

田井中遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告100

I 田井中遺跡 (第14次調査)

II 田井中遺跡 (第17次調査)

発行集 平成19年3月
財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (072) 994-4700

印刷 柳近畿印刷センター
〒581-0033 八尾市志紀町南2丁目131番地
TEL (072) 920-3488
FAX (072) 920-3455

表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 マットアート <70Kg>

